

長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書

平成 5 年度

財団法人 千葉県文化財センター

なが ら まちよこあなぐんとくます し ぐん
長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書

平成 5 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

恵まれた自然環境のもとで、数万年の昔から人々の生活が営まれてきた千葉県には、多くの遺跡が残され、とくに古墳は8千基以上、横穴墓は4千基以上が確認されております。これらは房総の歴史のみならず、わが国の歴史を解明するうえで欠くことのできない貴重な資料ですが、様々な開発によって失われていくものも少なくありません。

このため、千葉県教育委員会では、保護と活用に向けた基礎資料の整備が急務と考え、とくに重要な古墳や横穴墓について、国庫補助事業「重要遺跡発掘調査」の一環として発掘調査を実施してきました。

今年度は、長生郡長柄町に所在する長柄町横穴群徳増支群の調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。徳増支群は、全国的にみても、本県の上総地方に特徴的な「高壇式」横穴墓の典型的なものとしてよく知られており、その一部は県史跡に指定されています。調査の結果、徳増支群は35基の横穴墓で構成されていることが判明し、保存状況もよく、規模や内容などからも第一級の横穴墓群であることが再確認されました。さらに、第13号墓では、全国でもまれに見るほどの豊富な内容をもつ線刻壁画が発見されるなど、非常に大きな成果をあげることができました。

この事業の実施に当たり、文化庁をはじめとして、地元の長柄町教育委員会や土地所有者の皆さま方など多くの方々に御協力をいただきました。ここで関係各位に感謝を申し上げるとともに、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護のために、広く活用されることを願ってやみません。

平成6年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 森 成吉

凡　　例

1. 本書は、千葉県長生郡長柄町徳増字源六840他に所在する長柄町横穴群徳増支群（遺跡コード426-001）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を受けて行っている県内主要古墳発掘調査の第4年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 現地調査は、平成5年10月1日から10月29日にかけて実施した。調査面積は200m²である。なお、横穴付近の地形図（1/500、1/1,000）作成は開成測量株式会社に委託して実施した。測量面積は12,000m²である。
4. 調査および整理・報告書作成は、調査研究部長 高木博彦、事業課長 西山太郎、市原調査事務所長 石田廣美、同副所長 西川博孝の指導のもとに主任技師 麻生正信が担当した。本報告書で使用した写真のうち、第13号横穴墓の写真については、堀越知道氏の撮影によるものである。その他の遺構、遺物については、麻生正信が撮影した。
5. 調査の実施にあたっては、長柄町教育委員会から多くのご協力をいただいた。また、土地所有者の米良保之、若葉秀胤、増田喜拓、増田勝善の諸氏から調査に際し所有地の借用をご快諾いただき、田辺政寿氏には測量に際し種々ご高配をいただいた。さらに、調査隣接地の土地所有者および徳増地区の皆様にも種々ご協力をいただき、各々記して謝意を表します。
6. 現地調査から報告書の刊行にいたるまで、多くの諸氏よりご教示・ご指導をいただいた。また、長柄町横穴群徳増支群の横穴墓の壁面に漆喰状のものが付着していたため、東京国立文化財研究所名誉研究員 見城敏子先生に分析を依頼し、玉稿をいただいた。このほか、下記の諸氏からも種々のご指導をいただいた。各々記して謝意を表します。
財団法人長生都市文化財センター、加藤修司、津田芳男、松本昌久、菅谷通保、西原崇浩、田中 恵（敬称略・順不同）

目 次

序 文

凡 例

1	はじめに.....	1
1.	位置と環境.....	1
2.	周辺の遺跡.....	1
2	調査経過.....	3
1.	過去の調査.....	3
2.	調査の方法.....	4
3	遺構と遺物.....	10
1.	第1号横穴墓.....	10
2.	第2号横穴墓.....	12
3.	第3号横穴墓.....	13
4.	第4号横穴墓.....	14
5.	第13号横穴墓.....	17
6.	第14号横穴墓.....	20
7.	第15号横穴墓.....	22
8.	第16号横穴墓.....	23
9.	第17号横穴墓.....	24
10.	第18号横穴墓.....	26
11.	第19号横穴墓.....	28
12.	第20号横穴墓.....	30
13.	第21号横穴墓.....	32
4	長柄町横穴群徳増支群漆喰の同定.....	34
5	まとめ.....	36

挿図・図版目次

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 第1図 長柄町横穴群徳増支群の位置と周辺の遺跡
(1/25,000) | 第11図 第14・15・16号横穴墓実測図 (1/100)・第16
号横穴墓出土遺物実測図 (1/4・1/2) |
| 第2図 長柄町横穴群徳増支群と周辺地形図
(1/2,500) | 第12図 第17・18号横穴墓実測図 (1/100)・第18号横
穴墓出土遺物実測図 (1/4) |
| 第3図 第1小支群配置図 (1/200) | 第13図 第19・20号横穴墓実測図 (1/100) |
| 第4図 第2小支群配置図 (1/200) | 第14図 第20・21号横穴墓出土遺物実測図 (1/4)・第
21号横穴墓実測図 (1/100) |
| 第5図 第3小支群配置図 (1/200) | 第15図 県内の横穴墓の分布 (1/800,000) |
| 第6図 第4小支群配置図 (1/200) | |
| 第7図 第1・2・3号横穴墓実測図 (1/100) | 付図1 長柄町横穴群徳増支群地形測量図 (1/1,000) |
| 第8図 第4号横穴墓実測図 (1/100) | 付図2 第13号横穴墓玄室線刻面実測図 (1/20) |
| 第9図 第4号横穴墓玄室展開図 (1/100) | |
| 第10図 第13号横穴墓実測図・玄室展開図 (1/100) | |

写真図版目次

- | | |
|--|---|
| 図版1 遺跡遠景・第1号横穴墓・第2号横穴墓 | 図版8 第13号横穴墓玄室奥壁線刻面 (人物・鳥) |
| 図版2 第3号横穴墓・第4号横穴墓表道セクション・
第4号横穴墓玄室右棺台 | 図版9 第13号横穴墓玄室奥壁線刻面 (鳥・家・人物) |
| 図版3 第4号横穴墓玄室奥壁・第4号横穴墓玄室左
棺座・第9号横穴墓 | 図版10 第14号横穴墓・第13・14号横穴墓前トレンチ・
第15号横穴墓 |
| 図版4 第10号横穴墓・第11号横穴墓・第12号横穴墓 | 図版11 第16号横穴墓・第17号横穴墓・第18号横穴墓 |
| 図版5 第13号横穴墓・第13号横穴墓玄室奥壁左上半
部線刻面 (人物・鳥・四層櫻闇建物) | 図版12 第18号横穴墓遺物出土状況・第19号横穴墓・
第19号横穴墓キサゴ出土状況 |
| 図版6 第13号横穴墓玄室奥壁線刻面・第13号横穴墓
玄室右側壁線刻面 (建物・鳥・舟・人物) | 図版13 第20号横穴墓・第20号横穴墓遺物出土状況・
第21号横穴墓 |
| 図版7 第13号横穴墓玄室右側壁線刻面 (建物・鳥) | 図版14 長柄町横穴群徳増支群出土遺物 |
| | 図版15 漆喰分析試料と実体顕微鏡写真 (×6.3) |

表

- | |
|------------------------|
| 表1 第13号横穴墓表道右壁試料のスペクトル |
| 表2 長柄町横穴群徳増支群横穴計測値一覧表 |
| 表3 県内所在装飾横穴墓一覧表 |

1 はじめに

1. 位置と環境

長柄町横穴群徳増支群は千葉県長生郡長柄町徳増字源六840他に所在する。遺跡の所在する長柄町は千葉県のほぼ中央部にあり、東を茂原市、北と西を市原市、南を長南町に囲まれた狭い丘陵を中心とした町である。長柄町横穴群が所在するのは長柄町の南部地区で、この地域は太平洋に注ぐ一宮川の上流にあたり、複雑に開析され、入り組んだ谷津が多く、丘陵も狭い尾根で形成されている。この地域には笠森層とよばれる暗青色の凝灰質砂岩層が分布し、横穴墓を造るうえで良好な地層となっている。この狭い尾根の中腹部に浸食された谷津の大きさにより単独あるいは群集して、ほとんどの横穴墓が南向きに開口し、一宮川流域の長生郡内には、総数約1,200基を越える横穴墓が認められる。また、この地方に特有な形態である羨道と玄室の高さが著しく差のある「高壇式」とよばれる横穴墓が多く、古くから研究者に注目されてきた地域もある。

2. 周辺の遺跡（第1図）

周辺の主な遺跡をあげると、徳増支群のすぐ北側に所在する昭和62・63年度に財団法人長生都市文化財センターが調査した千代丸・力丸横穴墓群、平成元年に財団法人長生都市文化財センターが調査した四反目横穴墓、徳増支群の尾根続きで南側に所在する要害古墳群、下谷横穴墓群、昭和53・54年度に財団法人千葉県文化財センターが調査した山崎横穴墓群46基、昭和61・62年度に財団法人長生都市文化財センターが調査した山崎横穴墓群14基が所在する。また、徳増支群からみて一宮川の下流に昭和61年～63年度に調査した長南町岩川遺跡、今泉遺跡が所在する。また、古墳時代の高塚古墳についてみると全長74mを測る前方後円墳を含む古墳18基からなる長南町能満寺古墳群、全長93mを測る前方後円墳を含む古墳4基からなる長南町油殿古墳群が所在し、4世紀後半から5世紀初頭に比定されている。集落についてみると、前出の岩川遺跡、茂原市第六天向遺跡で古墳時代前期の住居跡が、今泉遺跡で後期の住居跡が検出されている。

当地域の遺跡分布の状況を各時代ごとにみると、先土器時代については確認されていない。縄文時代については早期条痕文、前期黒浜式、諸磯式、中期勝坂式、加曾利E式、曾利式、後期称名寺式、堀之内式、加曾利B式、晚期千綱式と長い期間にわたって断続的に営まれている。遺跡が立地する場所は丘陵の北側の裾部の斜面の一部である。台地裾部のやや平坦部に位置する例が多い。弥生時代については中期宮ノ台式が確認されている。縄文時代と同様の立地状況を示す。古墳時代の集落の立地状況は沖積地の微高地、台地裾の平坦部に展開し、すでに相当数の遺跡が圃場整備に伴って消滅したものと思われる。高塚古墳はこの地域には非常に例が少



第1図 長柄町横穴群徳増支群の位置と周辺の遺跡(1/25,000)

なく前方後円墳を含む4基からなる要害古墳群、前方後円墳1基の柳作古墳、前方後円墳の立町古墳しかなく、調査されていないので詳細は不明であるが、台地上と沖積地の微高地上に立地する。前期の高塚古墳が造られた後、後期後半から横穴墓が造られはじめ、高塚古墳に比較すると横穴墓は非常に数が多い。各河川流域を望む南側斜面を中心に立地する。長柄町内だけでも、25群、324基の所在が確認されている。奈良・平安時代については、多くの集落が確認されているが、古墳時代の集落と同じ立地状況であり、圃場整備および現在の集落が同じ場所に立地するため相当数が消滅しているものと思われる。

2 調査経過

1. 過去の調査

当地域における横穴墓の研究は、古くは明治時代に報告されている。昭和期に入り三木文雄氏の「上総国二宮本郷村押口横穴群の研究(1)(2)」(註1)は横穴墓を群としてとらえ、変遷を型式学的にとらえようとした、その後の横穴墓研究の方向性を示唆した。また、高橋三男氏による「東上総源六谷横穴群について」(註2)は当地域における特徴的な横穴墓の構造を明確にし、線刻画も報告している。当地域の文化の総体的な研究として上智大学史学会による「東上総の社会と文化」(註3)により、河川流域ごとの個々の地域相を従来の研究方法とは違う観点で研究し、とくに一宮川流域の横穴墓群の様相が明らかとなった。橋口定志氏はその流れを受けて、「千葉県・夷隅地域の横穴について」(註4)により、夷隅川流域の横穴墓の変遷の社会的背景について明らかにしている。野中徹氏は「東京湾東岸における横穴墳墓について」(註5)により房総地方の横穴墓の総括をしているが、総体把握を主眼としている。

齊藤忠氏による「長柄横穴群」(註6)は、長柄町内の横穴墓群の総体的調査を行いその数と形態の様相が明らかにされた。最近では、渡辺正治氏による「上総地方の横穴墓について」(註7)により西上総の湊川流域と東上総の一宮川流域の横穴墓の形態変遷を中心論じており、両河川の地域的な様相を明確にしているが、造営された年代についてはふれられていない。

平成期になると茨城県で開催された横穴墓のシンポジウムにおいて、松本昌久・上野恵司両氏による「千葉県内の横穴墓群」(註8)により千葉県の横穴墓の総括がなされた。この成果により千葉県内の横穴墓の様相がほぼ明らかになった。さらにこの成果をもとに西原崇浩氏による「上総地方の横穴墓の様相(上)」(註9)により房総地方の横穴墓の変遷と伝播経路について論究がなされた。また最近、松本昌久氏による「東上総における横穴墓について」(註10)により最近の調査成果に基づく群として調査された横穴墓から、群構成と形態分類および基準尺度による時期分類を行い、各地域の各横穴墓群の個別の分析を行い、古墳時代終末期の社会様相の変革が墓制に反映されていることを明らかにした。

また、周辺地域において、最近多くの横穴墓の調査がなされ、調査例が集積されている。

註

- 註1 三木文雄「上総国長生郡二宮本郷村押日横穴群の研究」『考古学雑誌』26巻1・2号 1886年
- 註2 高橋三男「東上総源六谷横穴群について」『古代』27号 1958年
- 註3 上智大学史学会「長生郡一宮川流域の横穴」「東上総の社会と文化」1968年
- 註4 橋口定志「千葉県夷隅郡地域の横穴について」『物質文化』19号 1972年
- 註5 野中 徹「東京湾東岸における横穴墳墓について」『史館』2号 1974年
- 註6 斎藤 忠「長柄横穴群」1977年
- 註7 渡辺正治「上総地方の横穴墓について」『研究連絡誌』18号 1986年
- 註8 西原崇浩「上総地方の横穴墓の様相（上）」「立正考古」30号 1991年
- 註9 松本昌久・上野恵司「千葉県内の横穴墓群」「関東横穴墓遺跡検討会資料」茨城県考古学協会 1991年
- 註10 松本昌久「東上総における横穴墓について」『多知波奈考古』創刊号 1993年

2. 調査の方法と経過

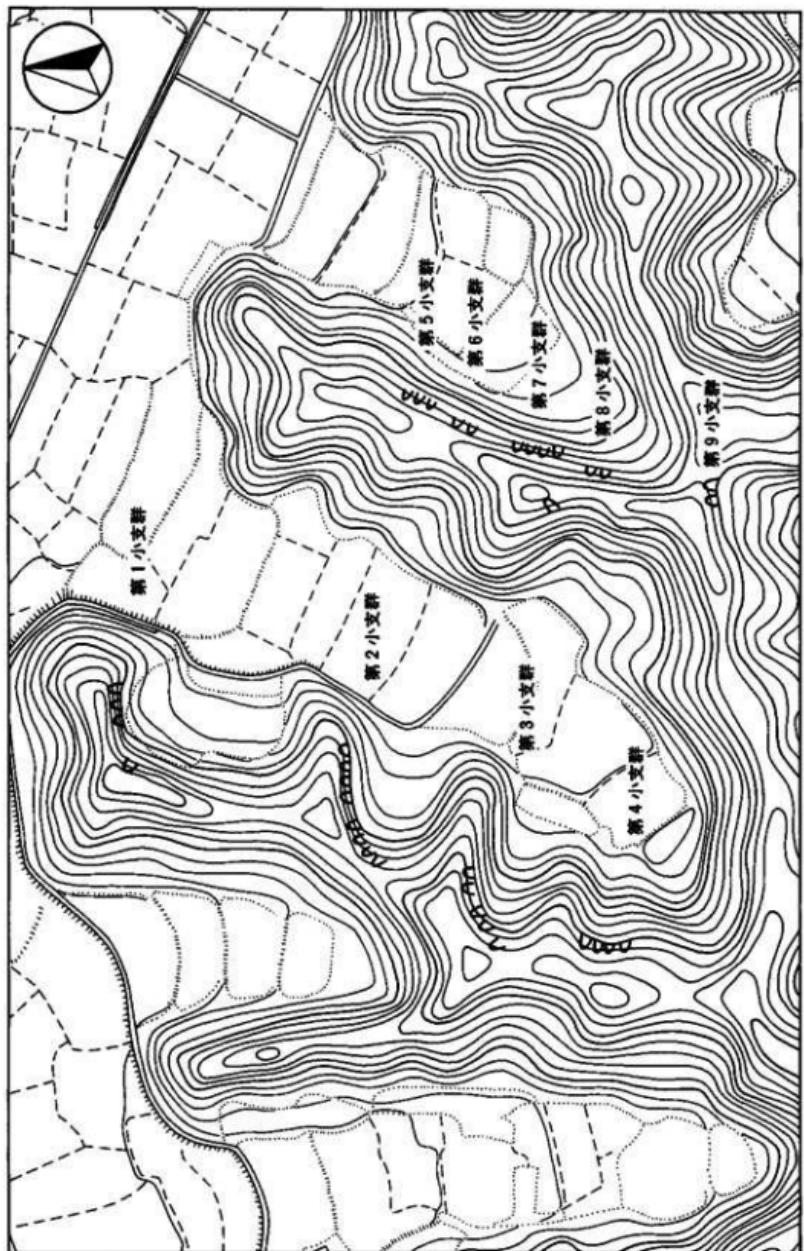
長柄町横穴群徳増支群の調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要古墳発掘調査の一環として行われたものである。財団法人千葉県文化財センターが委託を受け、平成5年10月1日から同月31日にかけて発掘調査を実施した。

今回の調査は各横穴墓の位置確認と横穴墓墓前域の確認を目的とした。発掘調査に先立ち、横穴墓周辺の地形測量図を委託作成した。また、発掘区設定のための基準点測量も行った。横穴墓周辺を20mごとに方眼の地区割りを行い大グリッドを設定した。南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットで割り振った。ただし、今回の調査では図面作成のための測量杭の設定のみに使用し、発掘区設定、遺物取り上げに際してはグリッドを考慮しなかった。

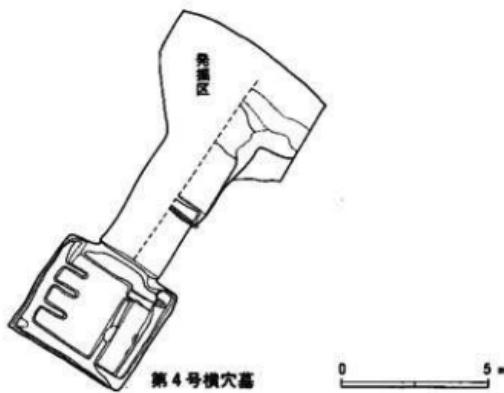
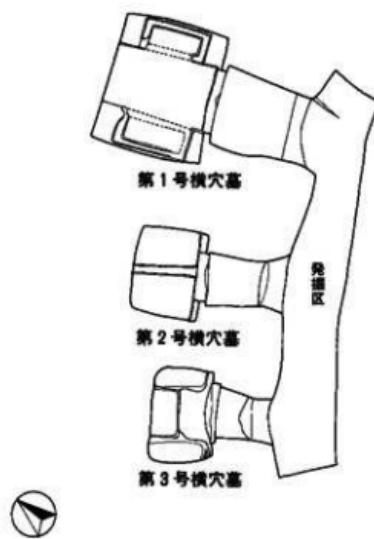
横穴墓周辺の草刈りおよび倒木の片づけから開始し、各横穴墓の羨道前にトレンチを設定した。北から第1～6発掘区とした。調査した発掘区は、第3～6図に示した。発掘区は基本的に2m幅で設定したが、場所によっては1mとした。羨道前の墓前域を調査する目的で設定したトレンチであったが、とくに墓前域として整形したようすがなかったため、各横穴墓の玄室内の清掃および羨道内の清掃も行った。凝灰質砂岩の基盤層がすぐ露呈し、トレンチの掘削および清掃が終了してしまったため、およびすべての横穴墓が開口していたため、羨道および玄室の平面測量を中心に実施した。なお、第5号～12号横穴墓については高橋三男氏の調査で平面図が発表されているので玄室の測量調査を省略した。

測量は、昭和63年度に千葉県教育委員会が実施した第1小支群～第4小支群の地形測量と同じように、東側の尾根に所在する第5小支群～第9小支群の正確な位置を測ったが、この段階で、斎藤忠氏による『長柄横穴群』で確認されている基数より1基多く確認された。さらに第1小支群～第4小支群の平面実測調査をするための基準点および水準点測量を行った。したがって、21基についてのみ清掃および横穴墓の平面測量を実施した。

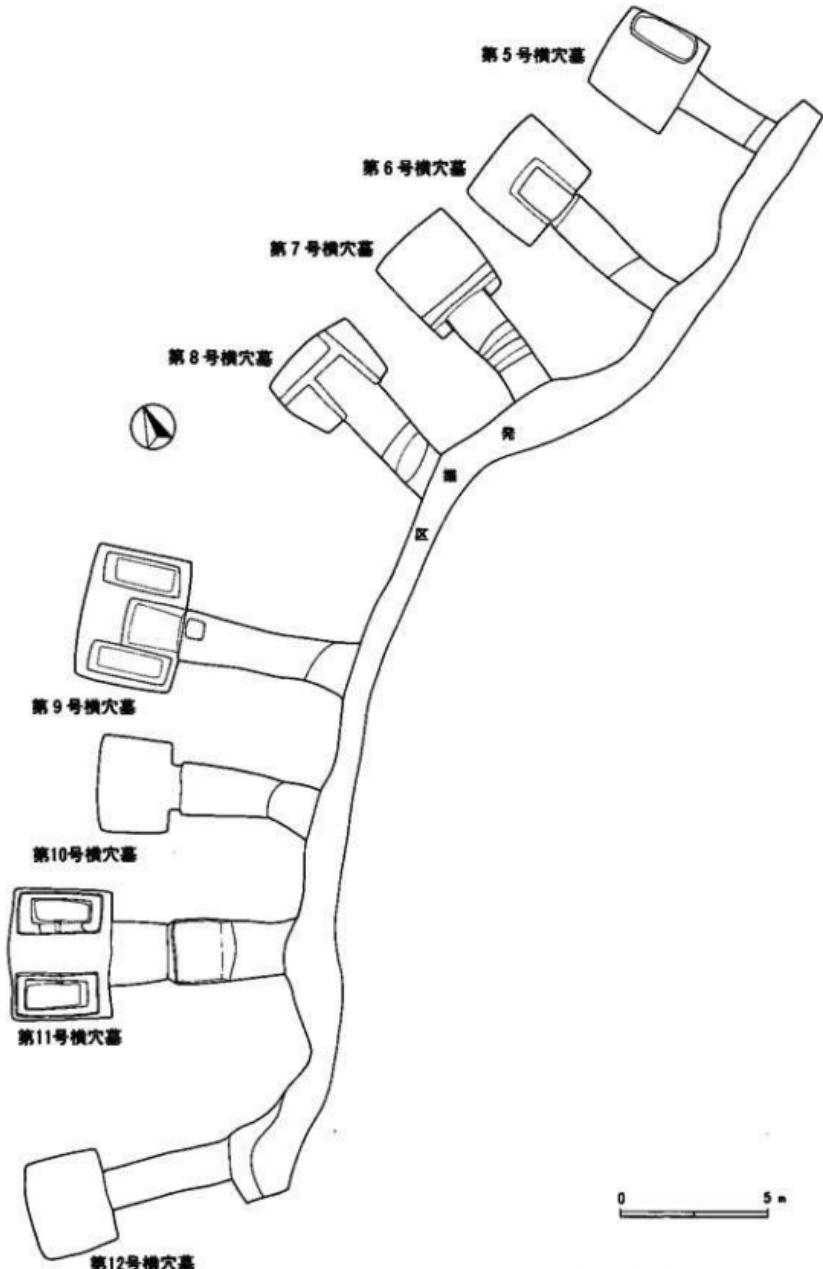
100m



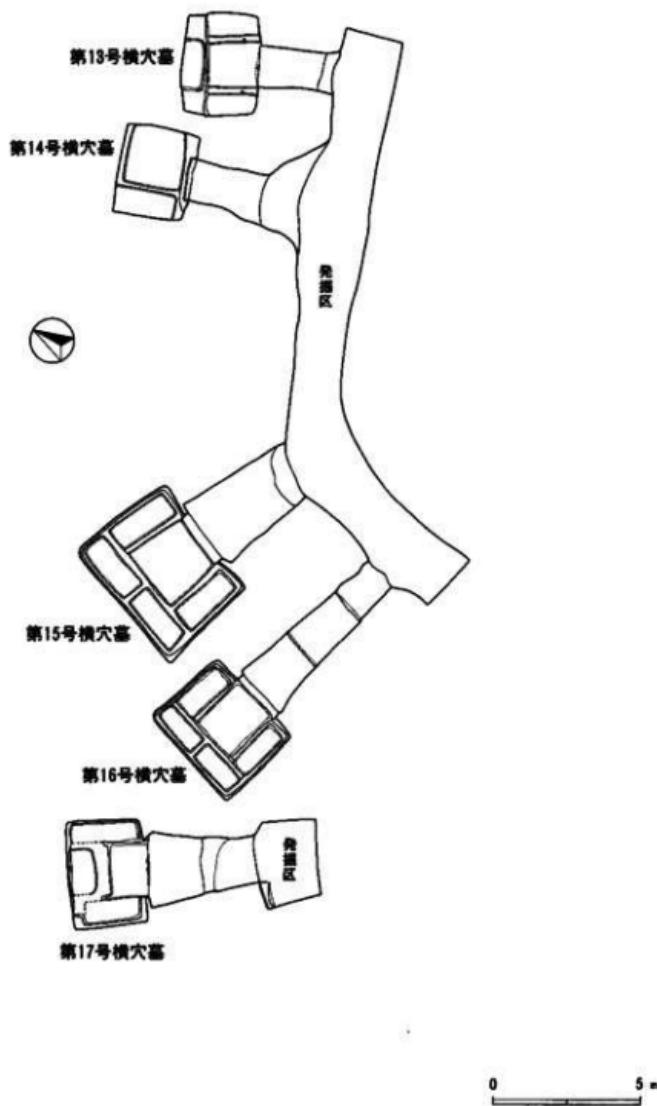
第2図 長柄町櫻六群越増支群と周辺地形図 (1/2,500)



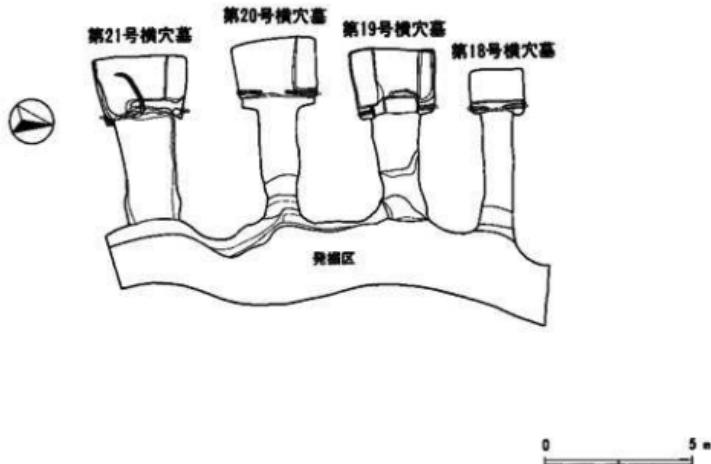
第3図 第1小支群（第1・2・3・4号横穴墓）配置図 (1/200)



第4図 第2小支群（第5・6・7・8・9・10・11・12号横穴墓）配置図 (1/200)



第5図 第3小支群（第13・14・15・16・17号横穴墓）配置図 (1/200)



第6図 第4小支群（第18・19・20・21号横穴墓）配置図 (1/200)

3 遺構と遺物（第2図・付図1）

長柄町横穴群徳増支群の所在する丘陵は標高40m～50m前後で、幅約10mほどの狭い尾根である。この尾根の東側は樹枝状にさらに小さく東側にのびている。徳増支群は徳増源六谷1横穴墓群ともよばれ21基が確認されている。この東側に位置する丘陵で南側に開口しているのが、徳増源六谷2横穴墓群であり、13基が確認されているが、今回の調査で1基増えて14基確認された。この小さな谷にそれぞれの小支群が位置している。西側の源六の尾根の一番先端にあたる北側から南側にかけて所在する横穴墓群は第1～4小支群に分けられ、東側の十ヶ二谷の尾根の一番先端にあたる北側から南側にかけて所在する横穴墓群は第5～9小支群に分けられる。

第1小支群は第1～4号横穴墓、第2小支群は第5～12号横穴墓、第3小支群は第13～17号横穴墓、第4小支群は第18～21号横穴墓にあたる。また、第5小支群は第22～24号横穴墓、第6小支群は第25～26号横穴墓、第7小支群は第27～30号横穴墓、第8小支群は第31・32・35号横穴墓、第9小支群は第33・34号横穴墓があたる。

構築の立地条件として標高の一番高い尾根の中腹から造り始め、南あるいは東に開口する条件に合致するあいだは、一つの谷に造られ続けるようである。したがって、谷の幅の狭いものは単独で、広いものは複数基造られるようである。また、形態についても玄室の天井プラン、玄室平面形、棺座の数、羨道の幅、高さ等が一つの谷ごとにまとまっているわけではなく、大変バラエティに富んでおり、遺存状態も良好である。

今回の調査は確認調査および測量調査が主眼であり、また、玄室内および羨道に堆積している土砂が少なく0.2m～2mほどであるため、遺物の取り上げ方法として小さい破片については各横穴墓一括で取り上げている。

1. 第1号横穴墓（第7図・図版1）

調査前状況と立地

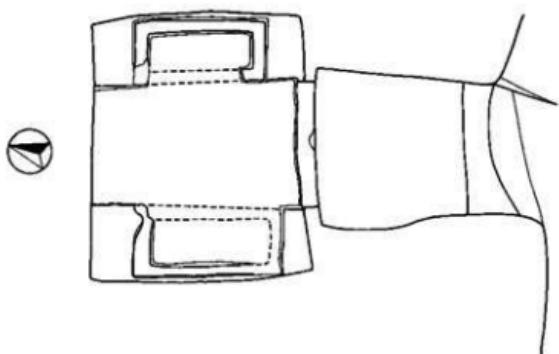
第1号横穴墓は、第1小支群の一番東にあり、南西方向に開口している。第1小支群のなかでは一番標高の低いところに構築されている。

土層堆積状況

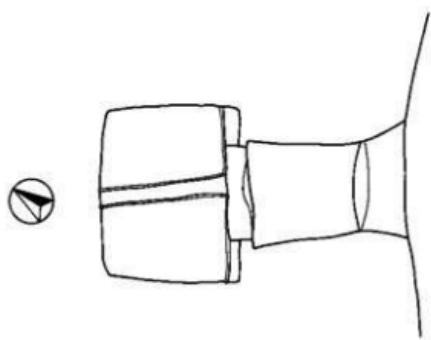
覆土は、羨道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

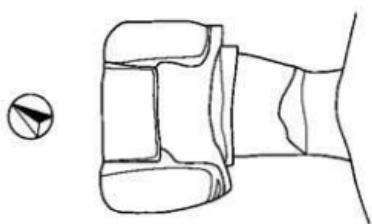
平面形は、奥壁で4.3m、左側壁で3.8m、右側壁で3.6m、前壁で4.25mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。



第1号横穴墓



第2号横穴墓



第3号横穴墓

0 2.5m

第7図 第1・2・3号横穴墓実測図 (1/100)

埋葬施設としては、右側壁と左側壁にそれぞれ棺座を構築する。右棺座は、長さ1.8m、幅0.65mを測る。左棺座は長さ2.1m、幅0.75mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.3m、横幅2.15mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.65m、玄門までの高さ1.75mを測る。形状は長方形であると思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、奥壁を最大幅に基前域に向かって幅を減少する台形であり、奥幅2.65m、主軸長3.6mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道の入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

2. 第2号横穴墓(第7図・図版1)

調査前状況と立地

第2号横穴墓は、第1小支群の東から2番目にあり、南方向に開口している。第1小支群のなかでは第1号横穴墓とほぼ同じ標高に構築される。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は、0.2mほど細かい土のようないわきが堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で2.8m、左側壁で2.2m、右側壁で2.2m、前壁で2.9mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁にそれぞれ棺座を構築する。右棺座は、長さ2.1m、幅1.35mを測り、左棺座は長さ2.2m、幅1.35mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.4m、横幅1.6mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.4m、玄門までの高さ1.4mを測る。形状は長方形であると思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、墓前域を最大幅に奥壁に向かって幅を減少する台形であり、奥幅1.8m、主軸長2.7mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道の入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

3. 第3号横穴墓（第7図・図版2）

調査前状況と立地

第3号横穴墓は、第1小支群の東から3番目にあり、南方向に開口している。第1小支群のなかでは第1・2号横穴墓よりやや高い標高に構築される。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室には、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で3.2m、左側壁で2.1m、右側壁で1.75m、前壁で2.8mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、右側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁と奥壁にそれぞれ棺座を構築する。右棺座は、長さ1.8m、幅0.7mを測り、左棺座は長さ2.1m、幅0.85mを測り、奥壁棺座は長さ1.65m、幅0.95mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.2m、横幅1.75mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、右側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。天井部は著しく崩落し遺存状態はわるい。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅1.75m、玄門までの高さ1.58mを測る。形状は長方形であると思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形であり、奥幅1.75m、主軸長1.8mを測る。天井は崩落していて、構築当時の形状は不明である。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道の入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

4. 第4号横穴墓(第8・9図・図版2・3)

調査前状況と立地

第4号横穴墓は、第1小支群の一番南にあり、南東方向に開口している。第1小支群のなかでは一番標高の高いところに構築され、かつ第1～3号横穴墓からやや離れ、開口している方向も異なっている。

土層堆積状況

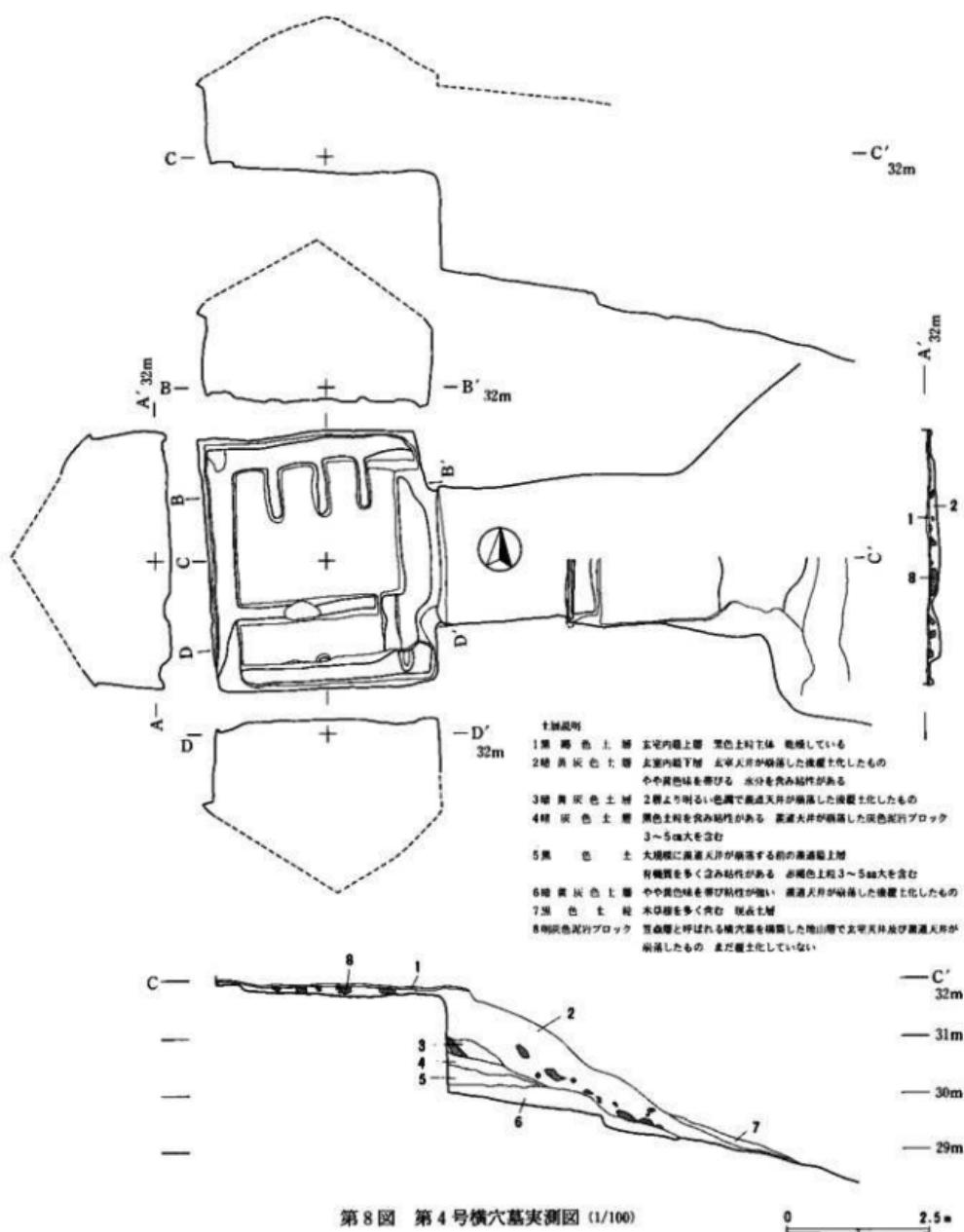
覆土は、羨道で床面から2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。羨道奥の床面から0.2mくらいに黒色土層があり、羨道の天井が大規模に崩落する前に長く覆土最上層となっていた層がある。玄室内は、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で4.4m、左側壁で3.8m、右側壁で3.85m、前壁で4.35mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁に棺台を、左側壁に棺座を構築する。右棺台は、長さ3.3m、幅1mを測り、側壁から奥壁に平行に幅0.3m、長さ1m、高さ0.15mの桁状の台を3条削りだしている。左棺座は長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。奥壁・両側壁は、奥行き10cmほどの段差で天井との境を明確に区分しており、奥壁が1.38m、左側壁が1.2m、右側壁が1.3m、左前壁が1.25m、右前壁が1.25mの高さをそれぞれ測る。前壁は、左側壁側が崩落して遺存状態は



わるい。左前壁は幅0.95m、高さ1.25m、右側壁は幅1m、高さ1.25mを測る。玄門は主軸長0.2m、横幅2.35mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。天井部は著しく崩落し遺存状態はわるい。

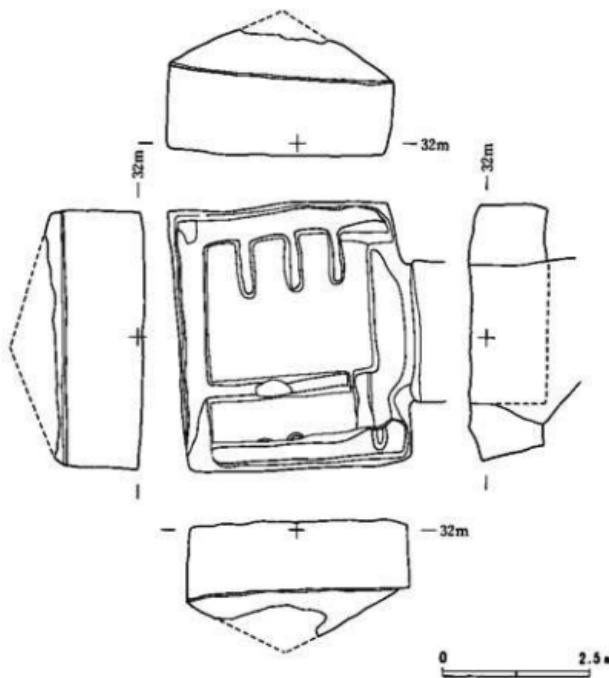
調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。奥壁・両側壁と棺座のあいだには幅0.15m、深さ0.1mの排水溝が検出された。左棺座の右側の縁を一部切り取って、棺座内から玄室外への排水溝が検出された。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.4m、玄門までの高さ1.7mを測る。形状は長方形であると思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、墓前域を最大幅に奥壁に向かって幅を減少する台形で、奥幅2.45m、主軸長9mを測る。奥壁から2.25mのところに奥壁と平行に幅0.15m、深さ0.2mほどの段を設ける。この段



第9図 第4号横穴墓玄室展開図 (1/100)

から墓前域側に向かって、羨道の幅が約0.3m広くなる。天井は崩落していて、構築当時の形状は不明である。玄室床面から覆土が充满しており、調査期間との関係で羨道の半分ほどしか調査ができなかった。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道の入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

5. 第13号横穴墓（第10図・図版5～9）

調査前の状況と立地

第13号横穴墓は、第3小支群の一一番東にあり、南西方向に開口している。第3小支群の中では一番標高の低いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は0.1mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で3.25m、左側壁で2.5m、右側壁で2.45m、前壁で3.2mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、奥壁と右側壁と左側壁にそれぞれ棺座を構築している。奥壁の棺座は、長さ1.7m、幅0.75m、深さ0.1m、右棺座は、長さ1.8m、幅0.75m、深さ0.12m、左棺座は長さ1.8m、幅0.75m、深さ0.1mを測る。

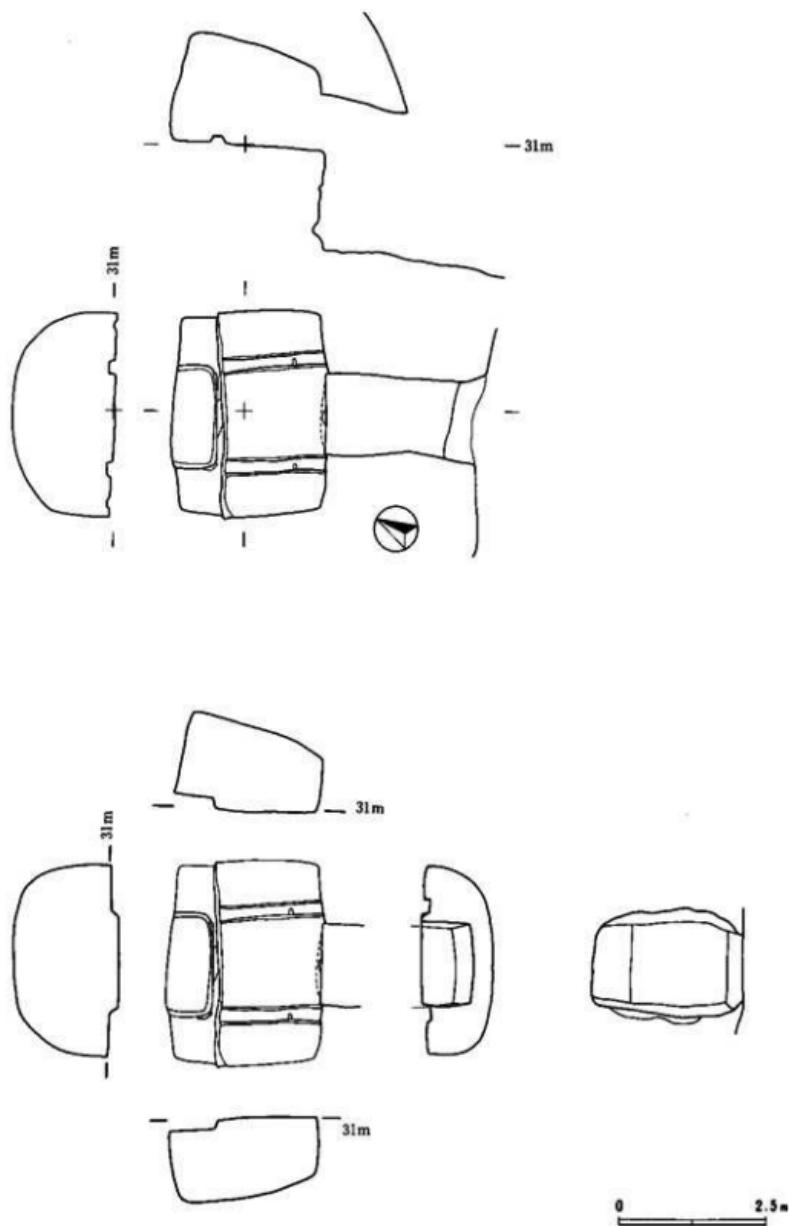
各壁および天井は、天井との境を明確にしない継ぎ接合型である。奥壁は、奥棺座に対してやや内湾に立ち上がり、高さ1.8mを測る。前壁は、棺座に対してほぼ垂直に立ち上がり、天井との境でやや内湾する。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅をせばめながら前壁へといたる。玄門は高さ0.8m、横幅1.4mを測る。

天井は奥壁との境を最高位とし、傾斜しながら玄門へと向かう。平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画が奥壁・両側壁に確認された。

線刻画（付図2・図版5～9）

線刻画は描かれたタッチと線の種類で、3種類ある。線刻は釘状の先端の鋭いようなもので



第10図 第13号横穴墓実測図・玄室展開図 (1/100)

描かれており、三角形の家および人物をのぞいてほぼ同じタッチで描かれている。

第1のものは、幅約0.5cm、深さ0.3cmくらいで、奥壁、左右側壁に描かれているものほとんどで「A群」とする。第2のものは、幅が約0.8cmと第1のものよりやや広くなり、奥壁の右上半分の鳥などが例で「B群」とする。第3のものは、幅1cm~1.5cm、深さ1cmくらいで彫り込まれていて、奥壁の人物、家等の例で「C群」とする。

A群

今回の調査により発見された線刻画のうち主体をなすもので、左側壁や右側壁に描かれているものすべて、奥壁に描かれている人物、家、右上半部の鳥をのぞいたものがこれである。

左側壁には、左から右に波線、中央部に弓、奥壁寄りに鳥が数羽描かれている。弓は、三日月型で左を向いている。鳥は嘴と胴体だけで足は描かれていない。

奥壁には、左半分上半部に鳥が十数羽、やや中央より鳥のなかに重なって屋根が四層の建物、その右に重なって四角形、三角形、9本の同心半円が描かれている。鳥は左側壁と違い、長い首と長い足が描かれている。首も長く、羽を広げているもの、目を描いているものなどがある。とくに規則的には描かれておらず、右を向いたり左を向いたりしている。鳥は現世とあの世を行き来する乗り物と考えられていたようである。四層の建物は、屋根を三角形に四層描き、一層の柱は3間で4本、1本は梯子を描いて5本描いていると思われる。四層の屋根の上には宝珠のようなものが描かれている。

右側壁には、右から左に波線、中央部に建物（五重塔）、その両脇に鳥3羽、奥壁よりに丸木舟と棹をさす人物1人、その下に鳥1羽が描かれている。このうち建物の右の鳥は、写実的で嘴、足が長くサギのような水鳥の仲間と思われる。

建物（五重塔）は、2階以上に逆三角形の屋根が四層描かれ、一階の三角形の屋根を含めると五層の建物としてみえる。さらに、相輪と思われるものがあることを根拠とするならば、五重塔を描いたものといえるかも知れない。しかし、上の4層の屋根が逆三角形であり、入口が3間の幅の真中ないという点、2層以上の各階の壁が描かれていない点からすれば、集落のなかで特別の意味をもつ建物の屋根飾りを描いたということとも考えられる。

丸木舟は、船首が尖り、船尾に波避けを表している。その下の鳥は、羽根が長く首がはつきりしない。建物の左の鳥は、左側壁の鳥のように足を描いていない。すべて右を向いている。

また、壁面の風化の状況から奥壁の左上半分が一番風化しているのでここから描かれ始めたと思われる。右側壁の建物（五重塔）は線刻画が風化していないので奥壁よりは後に描かれたものと思われる。

B群

奥壁の右上半部にある鳥で、やや太く描かれている。三角の家の上にあり、大きな目に見える丸と羽根を広げ、太い胴体と短い足が描かれ、正面を向いている。同じような図柄がその右

に一羽と上に足だけ描かれている。他の鳥がすべて横を向いているのに、この鳥だけは正面を向いており、鳥のようにも見える。

C群

奥壁左端の人物と中央部の三角の家、家のなかの人物、その右の人物等がある。太く、また深く描かれている。左端の人物は頭と首だけで、眉毛、目、鼻、口が描かれている。三角形の家は、線刻の幅が一番広く、また深い。壁なのか、家の半地下の部分の土止めの板を透視的に「ナマコ塀」のように斜格子状に描いている。この家のなかの人物は、左端の人物とは違い、顔をはっきりとは描いてはいない。胴体と手を描いている。その右の人物は、顔の輪郭と胴体を描いている。顔の描写は左端とはタッチが異なる。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、上幅1.2m、最大幅1.3m、下幅1.25m、高さ2.6m、玄門までの高さ1.65mを測る。形状は長方形をしており、玄室床面をほぼ垂直に狭道まで下降する。

狭道

狭道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅1.3m、主軸長2.55mを測る。

狭道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が狭道入り口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

6. 第14号横穴墓（第11図・図版10）

調査前の状況と立地

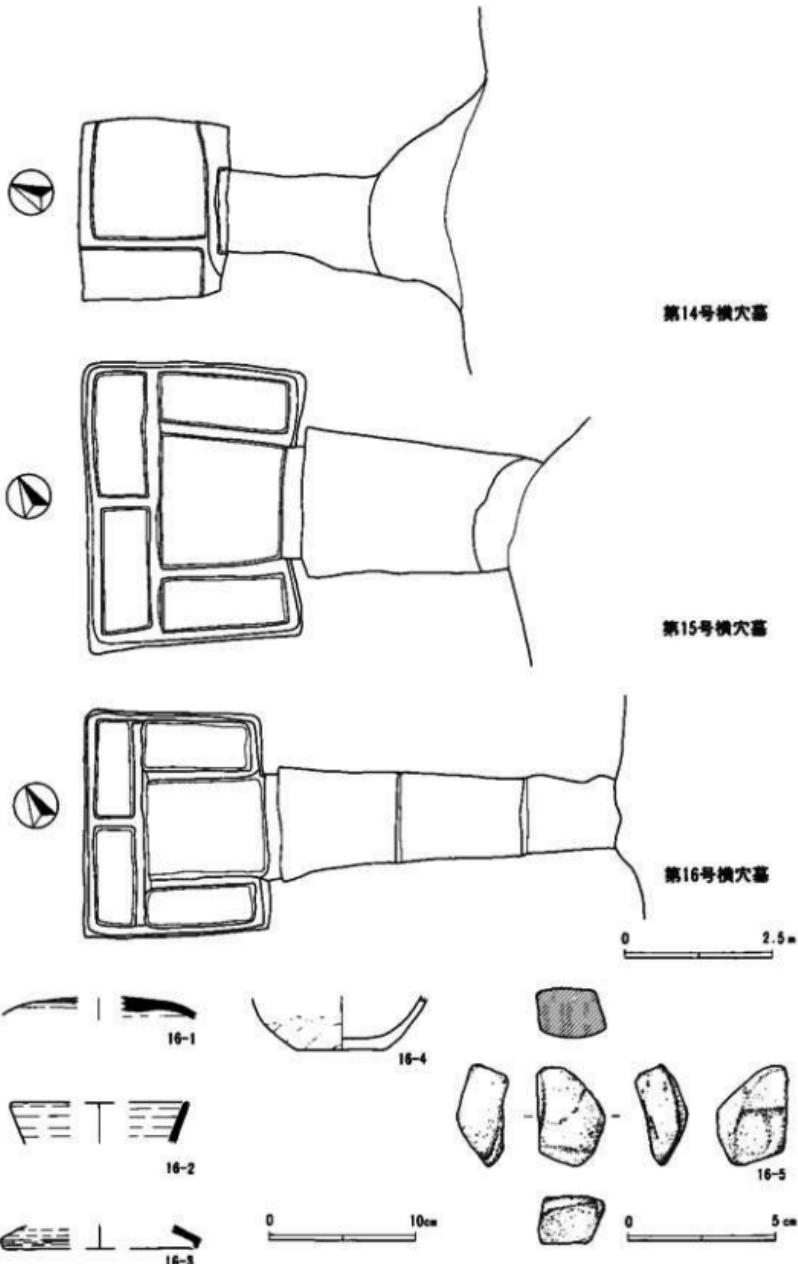
第14号横穴墓は、第3小支群の東から2番目にあり、南南西方向に開口している。第3小支群のなかで第13号横穴墓と同じで一番標高の低いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、狭道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は0.1mほど細かい土のようないちじくが堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で3m、左側壁で2.35m、右側壁で2.5m、前壁で2.75mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。



第11図 第14・15・16号横穴墓実測図 (1/100)

第16号横穴墓出土遺物実測図 (1/4・1/2)

埋葬施設としては、左側壁に棺座を構築する。左棺座は長さ2.05m、幅0.85mを測る。

各壁および天井は、天井との境を明確にしないドーム型をしている。奥壁は、奥壁に対してやや内湾して立ち上がり、前壁は、棺座に対してやや内湾して立ち上がり、天井との境がはっきりしない。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅をせばめながら前壁へといたる。玄門は横幅1.45mを測る。

天井はほぼ玄室の中央付近を最高位とし、傾斜しながら各壁へと向かう。平面は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、下幅1.45mを測る。形状は長方形であり、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、墓前域を最大幅に奥壁に向かって幅を減少する台形で、奥幅1.45m、主軸長3.9mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

羨道覆土中から貝輪の破片が出土したが図示はできなかった。

7. 第15号横穴墓（第11図・図版10）

調査前状況と立地

第15号横穴墓は、第31小支群の真中にあり、南南東方向に開口している。第3小支群のなかでは第13号横穴墓よりはやや標高の高いところに構築される。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で4.85m、左側壁で3.6m、右側壁で3.75m、前壁で4.35mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、右側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁と奥壁に棺座を2基構築する。右棺座は、長さ2.25m、

幅0.85mを測り、左棺座は長さ2.15m、幅0.85m、右奥棺座は長さ2.15m、幅0.9m、左奥棺座は長さ2.05m、幅0.85mを測る。奥壁・両側壁と棺座の間は、前壁の玄門をのぞく部分には幅0.07m～0.15mの排水溝が検出された。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.35m、横幅1.95mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、右側壁をほぼ直角にし、左側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.55m、玄門までの高さ1.86mを測る。形状は長方形と思われ、玄室床面をほぼ垂直に狭道まで下降する。

狭道

狭道は、奥壁を最大幅に基前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅2.55m、主軸長3.7mを測る。

狭道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が狭道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関連する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

8. 第16号横穴墓（第11図・図版11）

調査前状況と立地

第16号横穴墓は、第3小支群の西から2番目にあり、南方向に開口している。第31小支群のなかでは二番目に標高の高いところに構築される。

土層堆積状況

覆土は、狭道で床面から0.2m、墓前域で床面から0.1mほど堆積している。玄室内は、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で3.8m、左側壁で3.15m、右側壁で2.9m、前壁で3.55mを測る、横長方形を呈する。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁と奥壁に棺座を2基構築する。右棺座は、長さ1.85m、

幅0.85mを測り、左棺座は長さ1.85m、幅0.65m、奥壁右棺座は長さ1.65m、幅0.65m、奥壁左棺座は長さ1.7m、幅0.7mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.25m、横幅1.75mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。奥壁・両側壁と棺座のあいだ、前壁の玄門をのぞく部分には幅0.07~0.15mの排水溝が検出された。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.4m、玄門までの高さ1.7mを測る。形状は長方形をしていると思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、奥壁を最大幅に基前域に向かって幅を減少する台形であり、奥幅1.95m、主軸長5.8mを測る。奥壁から1.95mのところに奥壁と平行に幅0.07mほどの段、奥壁から4.1mのところにも奥壁と平行に幅0.12mほどの段を設ける。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関連する施設は確認されなかった。

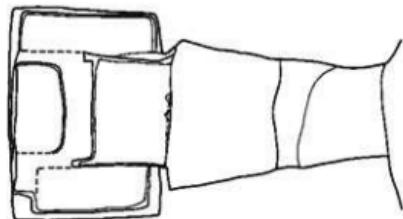
遺物

羨道覆土中から須恵器蓋破片2個体分、須恵器杯破片、土師器甕破片、軽石が出土した。2は須恵器杯身で口径12cm(復元径)を測る。色調は明灰色、焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。3は須恵器杯蓋で口径13cm(復元径)を測る。色調は暗灰色、焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。8世紀代に比定される。4は土師器甕で底径6cmを測る。色調は灰褐色、胎土に長石を少し含む。焼成は良好である。調整は、内外面ともヘラなでした後、体部下端をヘラ削りする。5は軽石で長さ4.9cm、幅3.2cm、高さ2.3cmを測る。出土位置は一括取り上げのため図示できなかった。その他に図示はしなかったが、土師器杯身破片、須恵器杯蓋破片が羨道覆土中から出土している。

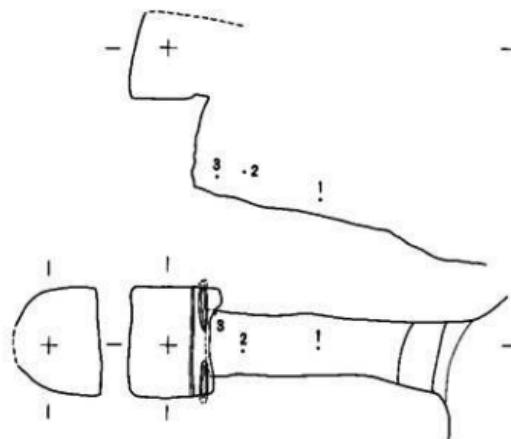
9. 第17号横穴墓(第12図・図版11)

調査前状況と立地

第17号横穴墓は、第3小支群の一番西にあり、南方向に開口している。第3小支群のなかで

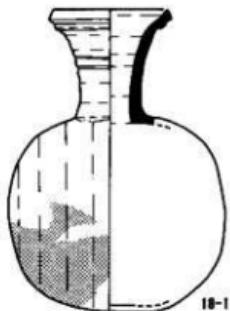


第17号横穴墓



第18号横穴墓

0 2.5m



18-1



18-2



18-3

0 10cm

第12図 第17・18号横穴墓実測図 (1/100)

は一番標高の高いところに構築され、かつ第13～16号横穴墓からやや離れ、開口している方向も異なっている。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から0.5m、墓前域で床面から0.8mほど堆積している。玄室内は、0.2mほど細かい塵のような覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で3.55m、左側壁で2.5m、右側壁で2.45m、前壁で3.35mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁と奥壁に棺座を構築する。右棺座は、長さ2.35m、幅0.65mを測り、左棺座は長さ2m、幅0.85m、奥壁棺座は長さ1.55m、幅0.9mを測る。

各壁は、床面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。玄門は主軸長0.15m、横幅1.9mを測る。

天井は寄棟形に造られており、平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状であったと思われる。下幅2.5m、玄門までの高さ1.36mを測る。形状は長方形と思われ、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、墓前域を最大幅に奥壁に向かって幅を減少する台形で、奥幅2.5m、主軸長3.65mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

10. 第18号横穴墓（第12図・図版11・12・14）

調査前の状況と立地

第18号横穴墓は、第4小支群の一番北にあり、南南東方向に開口している。第4小支群のなかでは一番標高の低いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から1.6m、墓前域で床面から1mほど堆積している。玄室内は0.5mほど覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で1.8m、左側壁で1.4m、右側壁で1.5m、前壁で1.75mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、奥壁に平行に棺座を構築する。棺座は長さ1.85m、幅1.1m、深さ0.1mを測る。前壁から0.1mほど離れて、玄門部を除き前壁と平行に両側壁から幅0.15mの排水溝を構築する。

各壁および天井は、天井との境を明確にしない継ぎ縫合型である。奥壁は、棺座に対してやや内湾して立ち上がり、高さ1.45mを測る。前壁は、棺座に対してほぼ垂直に立ち上がり、天井との境でやや内湾する。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅をせばめながら前壁へといたる。玄門は横幅1.1mを測る。

天井は奥壁との境を最高位とし、傾斜しながら玄門へと向かう。平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、下幅1.1m、玄門までの高さ1.58mを測る。形状は長方形で、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅1.1m、主軸長4.2mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

羨道覆土中から須恵器フラスコ型壺瓶、土師器碗、土師器杯が出土した。6は口径7.8cm、器高20.4cm、頸高7.1cm、胴径14.2cm、肩高13.3cmを測る。色調は灰色、焼成は良好である。頸部中央に2条の明確な沈線を施し、口縁直下に段部を形成する。胴部を形成した後蓋をし、胴部を球形に整形し、胴部横に頸部を接合する部分を穿孔し、頸部を接合している。調整は体部外面および頸部をろくろ整形している。胴部外面下半及び頸部内面に自然釉がかかる。7世紀第

1四半期に比定される。静岡県湖西窯産と思われる。7は土師器碗で口径15.6cm(復元径)を測る。色調は暗褐色、焼成は良好で、胎土は細長石を含む。調整は口縁部を指なでし、体部内外面ともへらなである。7世紀代に比定される。8は土師器杯身で口径12.2cm、器高3.2cmを測る。色調は内面暗褐色、外表面暗褐色、体部外面底部一部黒色、焼成は良好である。調整は口縁部を指なでし、体部内外面ともへらなで後、へらみがきしている。7世紀代に比定される。

11. 第19号横穴墓（第13図・図版12）

調査前の状況と立地

第19号横穴墓は、第4小支群の北から2番目にあり、南東方向に開口している。第4小支群の中では2番目に標高の低いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、狭道で床面から1.2m、墓前域で床面から1m程堆積している。玄室内は0.5mほど覆土が堆積していた。

玄室

平面形は、奥壁で2.9m、左側壁で2.3m、右側壁で2.1m、前壁で2.45mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、右側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁と左側壁に棺座を構築する。右棺座は、長さ1.7m、幅0.55m、深さ0.1m、左棺座は長さ1.95m、幅0.85m、深さ0.075mを測る。

各壁および天井は、天井との境を明確にしない緩薄鉢型をしている。奥壁は、前壁に対してやや内湾して立ち上がり、高さ1.9mを測る。前壁は、棺座に対してほぼ垂直に立ち上がり、天井との境でやや内湾する。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅をせばめながら前壁へといたる。玄門は高さ1.45m、横幅1.5mを測る。

天井は奥壁との境を最高位とし、傾斜しながら玄門へと向かう。平面形は奥壁を基準とした場合、右側壁をほぼ直角にし、左側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

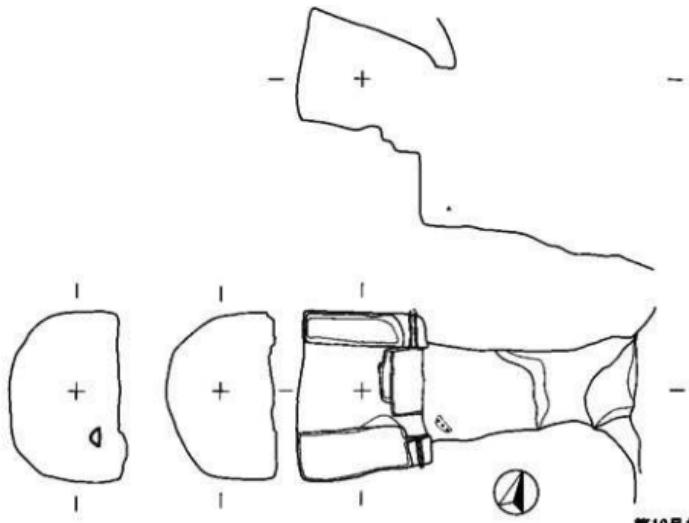
隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、下幅1.7m、高さ2.7m、玄門までの高さ1.16mを測る。形状は長方形をし、玄室床面をほぼ垂直に狭道まで下降する。

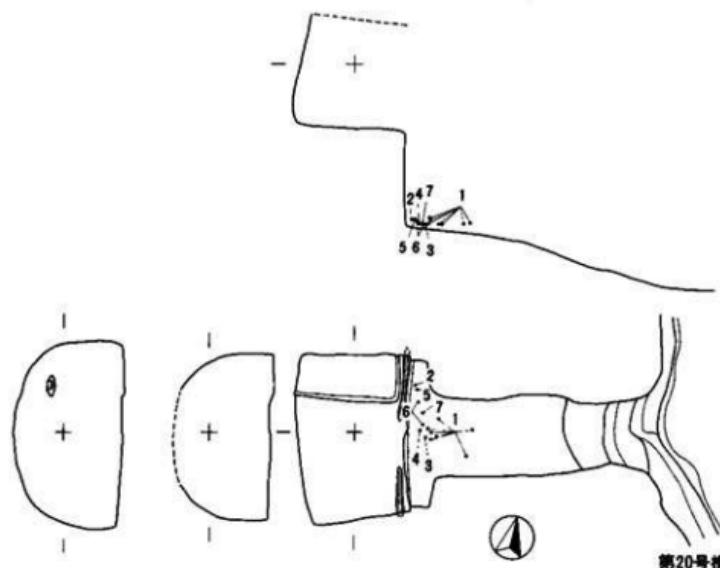
狭道

狭道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅1.3m、主軸長2.55mを測る。

狭道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかったが、狭道覆土中から横穴墓



第19号横穴墓



第20号横穴墓

第13図 第19・20号横穴墓実測図 (1/100)

0 2.5m

を構築した地層と同じ凝灰質砂岩の切石が2個体出土した。大きさは、長さ0.5m、幅0.2m、厚さ0.15mである。閉塞に利用した石材としては数が少なく、墓前域からも同様のものが発見されていないことから、閉塞用の石材とは断定しがたく、類例の発見をまって再度考察したい。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口からゆるやかに傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関連する施設は確認されなかった。

遺物

羨道覆土中からキサゴの貝殻、土師器壺胴部破片が出土したが図示はできなかった。

12. 第20号横穴墓（第13・14図・図版13・14）

調査前の状況と立地

第20号横穴墓は、第4小支群の南から2番目にあり、南南東方向に開口している。第4小支群のなかでは2番目に標高の高いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、羨道で床面から1.6m、墓前域で床面から1mほど堆積している。玄室内は0.6mほど覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で2.9m、左側壁で1.7m、右側壁で1.9m、前壁で2.65mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態が悪く奥壁に対して、左側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁に棺座を構築する。右棺座は、長さ1.75m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。

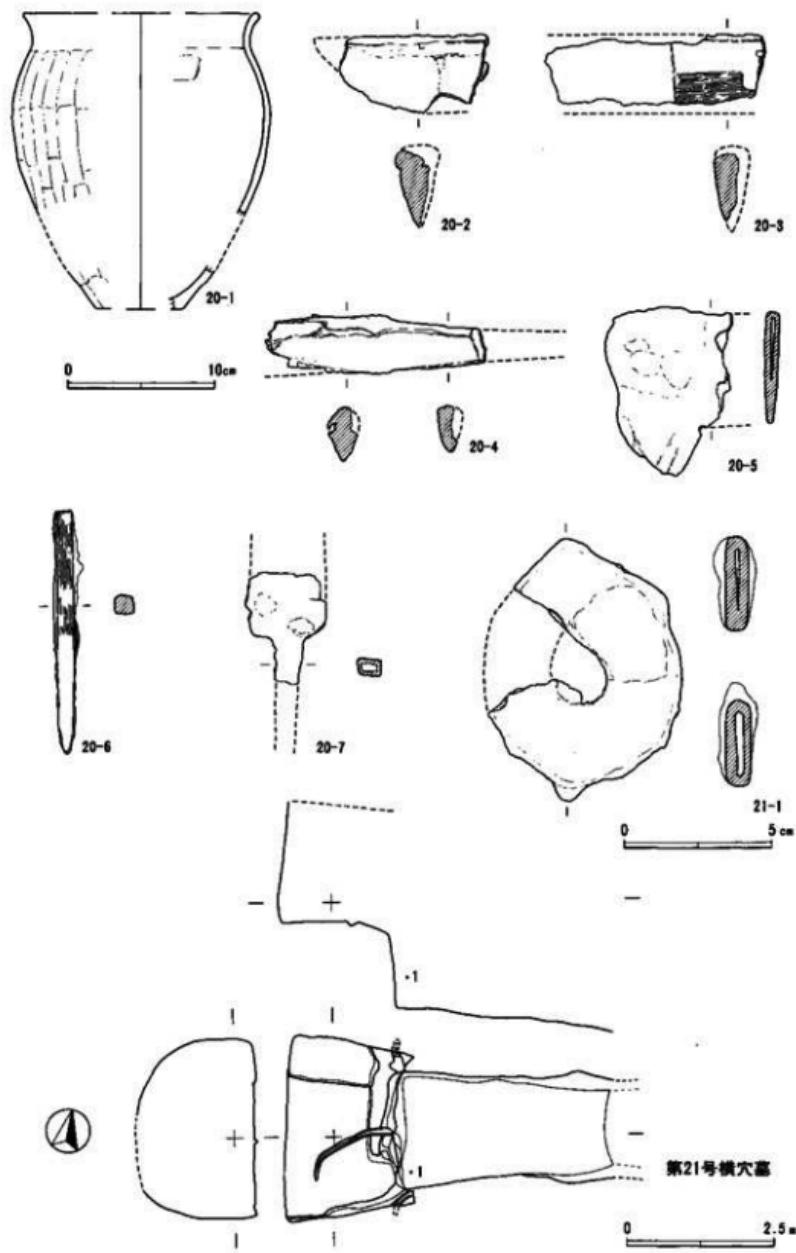
各壁および天井は、天井との境を明確にしない継続鉢型を呈している。奥壁は、奥棺座に対してやや内湾して立ち上がり、高さ1.9mを測る。前壁は、棺座に対してほぼ垂直に立ち上がり、天井との境でやや内湾する。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅をせばめながら前壁へといたる。玄門は横幅2.45mを測る。

天井は奥壁との境を最高位とし、傾斜しながら玄門へと向かう。平面形は奥壁を基準とした場合、左側壁をほぼ直角にし、右側壁を主軸方向にあわせ、横長方形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、下幅2.45m、玄門までの高さ1.56mを測る。形状は長方形で、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。



第14図 第20・21号横穴墓出土遺物実測図 (1/4)

狭道

狭道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅2.45m、主軸長4mを測る。平面が「T」字形を呈し、奥壁から0.4mのところで幅が狭くなる。当支群のなかでは第7号横穴墓も同様の平面形である。

狭道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が狭道入口から急に傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

狭道覆土中から刀子破片、鉄錐破片2個体、土師器壺破片が出土した。1は土師器壺で色調は橙褐色、焼成は良好、胎土に砂粒を多く含む。口径16cm、器高20cm(復元高)、底径6cm(復元径)を測る。調整は口唇部は指なで、口縁部はヘラなで、体部は縱方向のヘラ削りを施す。2は刀子の破片で、切先部分と考えられる。現存長5cm、現存幅2.7cm、現存厚1.3cmを測る。出土したときは一部錆びていたが銀色をしていた。3は刀子の破片で、刀身部分と考えられる。現存長7.5cm、現存幅2.4cm、現存厚0.8cmを測る。4は刀子の破片で、茎の部分と考えられる。現存長7.6cm、現存幅2.1cm、現存厚1.1cmを測る。目釘穴等は確認できない。5は刀子の破片で刀身部分と考えられる。現存長4.2cm、現存幅5.7cm、現存厚0.6cmを測る。錆が著しい。6は鉄錐の茎の部分で、現存長8.3cm、幅0.7cm、厚さ0.7cmを測る。7は鉄錐の破片で、現存長3.7cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmを測る。

13. 第21号横穴墓(第14図・図版12・14)

調査前の状況と立地

第21号横穴墓は、第4小支群の一番南にあり、南南東方向に開口している。第4小支群のなかでは一番標高の高いところに構築されている。

土層堆積状況

覆土は、狭道で床面から2.5m、墓前域で床面から1mほど堆積している。玄室内は1.5mほど覆土が堆積していた。

玄室

平面は、奥壁で3.2m、左側壁で2.2m、右側壁で2.05m、前壁で2.55mを測る、横長方形である。床面は開口していたため遺存状態がわるく奥壁に対して、右側壁を直角に造っている。

埋葬施設としては、右側壁に棺座を構築する。右棺座は長さ1.5m、幅0.75m、深さ0.1mを測る。

各壁および天井は、天井との境を明確にしない縱蒲鉾型である。奥壁は、奥棺座に対してや

や内弯して立ち上がり、高さ2mを測る。前壁は、棺座に対してほぼ垂直に立ち上がり、天井との境でやや内弯する。両側壁は、この奥壁からじょじょに幅を狭めながら前壁へといたる。玄門は横幅2.05mを測る。左側壁側に幅0.15m、深さ0.07m、玄室中央部に幅0.1m、深さ0.05mの排水溝を構築している。

天井は奥壁との境を最高位とし、傾斜しながら玄門へと向かう。平面形は奥壁を基準とした場合、右側壁と左側壁を主軸方向にあわせ、羨道からみて逆台形に構築している。

調査時には、閉塞等に関連する施設等は確認されなかった。玄室床面の遺存状態はよくない。線刻画は確認されなかった。

隔壁

隔壁は、壁面に玄門をくりぬく形状で、上幅2.07m、下幅1.95m、玄門までの高さ1.28mを測る。形状は長方形で、玄室床面をほぼ垂直に羨道まで下降する。

羨道

羨道は、奥壁を最大幅に墓前域に向かって幅を減少する台形で、奥幅1.95m、主軸長3.4mを測る。

羨道において、排水溝、閉塞に関する施設等は確認されなかった。

墓前域

墓前域は床面が羨道入口から急に傾斜し、とくに平坦面を整形してはいない。排水溝、床面の段差、閉塞に関する施設は確認されなかった。

遺物

羨道覆土中から鈎が出土した。1は鉄製の刀の鈎で長さ12.7cm、幅9.6cm、厚さ2cmを測る。梢円形である。

4 長柄町横穴群徳増支群漆喰の同定

日本文化財環境研究所

見城 敏子
新井 英夫

長柄町横穴群徳増支群の周辺は軟らかい泥岩からなる丘陵が、複雑に入り組むように発達している。横穴墓はこうした丘陵の主に南斜面に、数基ずつ並んでつくられている。

これらの横穴墓は壁面の下部一面が白く塗られたものと、壁面にベンガラが発色しているのが特徴である。この白い部分が漆喰か否か、また、ベンガラの成因について調査検討を行った。

1. 分析

壁面のサンプリングについて、徳増支群の第1から第4小支群には21基の横穴墓が存在するが、その内の肉眼で見て壁面（白い部）の遺存の良好な横穴墓から採取した。羨道部底面より約1.5mほどの高さの右壁面中央部を中心に採取した。右壁面及び羨道部の壁面（白い部）の遺存が不良のものについては、左壁及び玄室内から採取した。

試料の構成は母岩に暗褐色層（厚さ約0.8mm）が付着し、その上に白い層（0.1mm）が塗られている。また、ベンガラが発色している壁面では、ベンガラはこの白い層の上に見られる。暗褐色の部分は刃がたたない位置。

各号横穴墓の壁面の暗褐色部の赤外吸収スペクトルは表1（第13号横穴墓羨道右壁試料のスペクトル）と殆ど同じであり、珪藻土 [$\text{SiO}_2 \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ (87 : 7 : 2)] によく似ている。また、この暗褐色層は鉄を多量に含有しているのが特徴である。

暗褐色層の上にある白い層の分析を行った。この白い部分を蒸留水と共に煮沸し、濾過した抽出液を乾燥して皮膜を得た。この皮膜の赤外線吸収スペクトルはフノリの特性吸収ピークを含んでおり、フノリ様の膠着剤が同定された。また、白い層からはかなりのカルシウムが検出された。

2. 検討

徳増支群横穴墓の母岩は泥岩から出来、非常にもろいので、母岩の壁面を堅めるために、珪藻土の粘土で層を作ったものと思われる。また、横穴墓周辺で珪藻土を手に入れることは比較的容易であり、珪藻土は水を吸収して堅い地固めになることが知られている。このことは暗褐色部が堅くて削るのに困難である点からみても合点が出来る。このようにして作った下地壁面に、消石灰に膠着剤を混ぜて、うすく塗って仕上げたと思われる。古来から使用されてきた漆

噴は消石灰にフノリ、ツノマタなど膠着剤と麻布クズなどの繊維物質を配合したもので、これを水でよく練って、壁の塗装に用いられている。今回の横穴墓の壁面もこのような古来からの漆喰塗装法によって塗装されたと見ることが出来る。但し、麻布クズが混入していないのは、徳増支群の横穴墓の特徴として、珪藻土で固められた壁面に塗装するため、麻布クズによる塗面強化の必要がなかったものと考えられる。

暗褐色の珪藻土層には鉄分が多量に含まれている点から、長い間に、何らかの作用で鉄が水溶性の形で表面へ押し上げられ、表面上に析出した後、酸化または加水分解されて、ベンガラとして発色したと考えられる。第9号横穴墓はこの横穴群の中で高い所にあり、左壁は日光照射時間が多く、入口に近いため風雨による壁面の浸食がはげしいと想像されるので、ベンガラ析出が顕著に見られる。

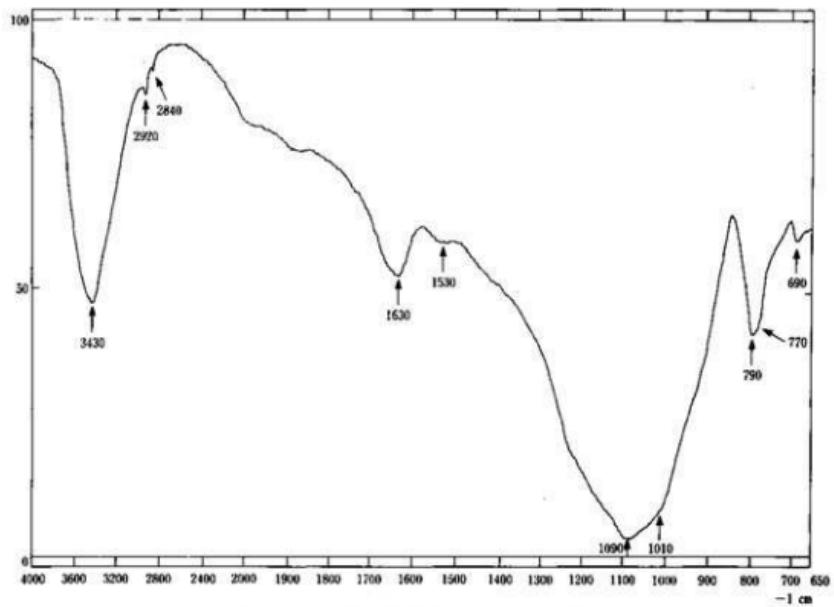


表1 第13号横穴墓後道右壁試料のスペクトル 波長 — →

5 まとめ

長柄町横穴群は25群324基からなる大規模な横穴群である。今回調査した長柄町横穴群徳増支群は9つの小支群に分かれ、総数35基で構成されているもので、長柄町横穴群中で最も遺存の良い支群の一つである。從来よりこの徳増支群は各横穴の規模の大きさ、遺存の良さ、特に、玄室内部の精緻な家形は全国屈指のものとして研究者の間では有名なものである。今回の調査は徳増支群の各横穴の基礎的資料を得る事を第1の目的に実施したものであり、発掘調査自体は最小限の範囲で行われた。にもかかわらず、過去の調査、研究を補うに余りある大きな成果をあげることができた。それは長柄町横穴群徳増支群の年代の一点を確定できたことであり、線刻画の再評価ができたことであり、科学的分析を実施し漆喰、ペンガラを検出し、築造当時の状況を復元できるようになったことである。以下、簡単に要点を記してまとめとしたい。

A 東上総における横穴墓の特徴

房総における横穴墓の分布状況は第15図で示してあるが、下総東部、東上総、西上総、安房の四地域に集中していることが看取できる。これは横穴墓を構築できる固い地層が露出している自然地形と一致している。同時に群集墳を築造しにくい狭い屋根で構成された自然地形の地域でもある。特に東上総の長柄町と安房の三芳村に集中しているのは特筆すべきものがある。

東上総では南白亜川から夷隅川にかけて分布し、中でも一宮川と夷隅川流域に濃密な集中が認められる。これは前述した自然地形の関係でいえば笠森層という粘質度の高い地層の分布と一致している。

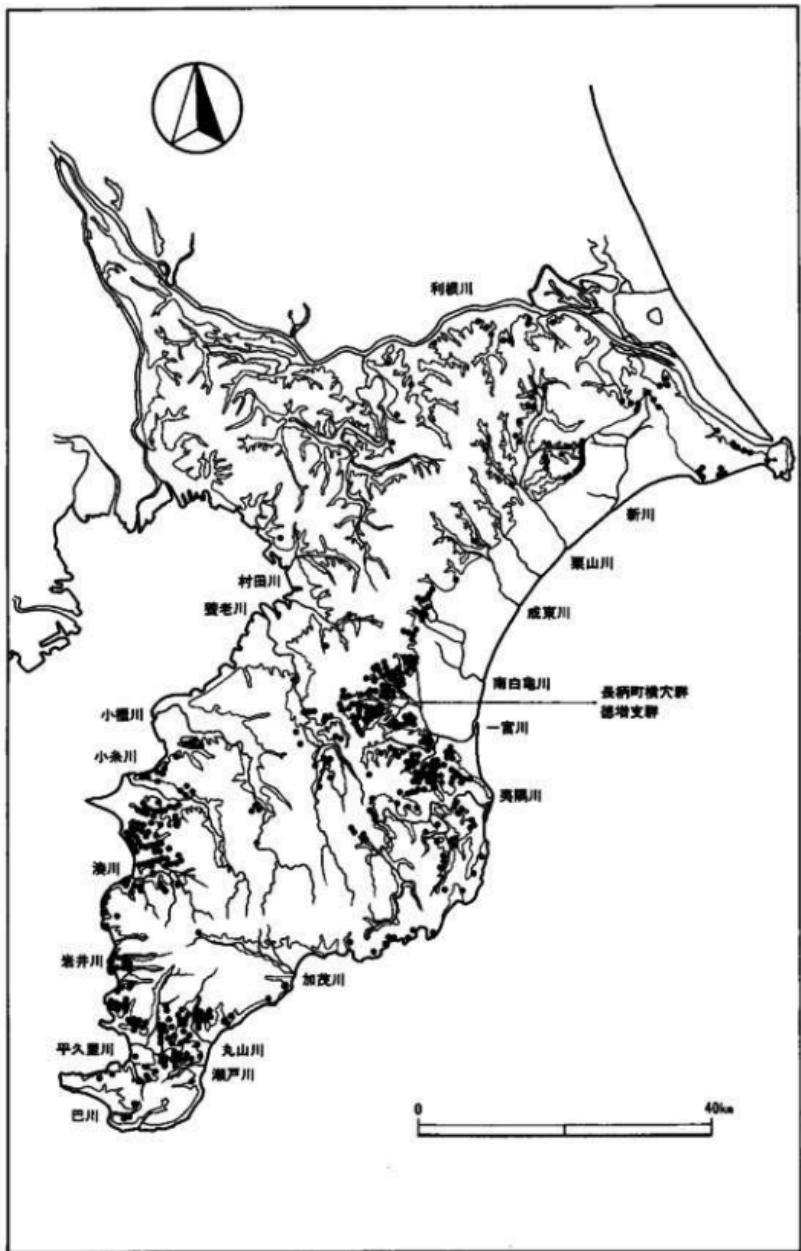
東上総における横穴墓の出現は、睦沢町東谷横穴群や勝浦市長綱横穴群の調査例などから、6世紀末に遡ることが明らかである。玄室と羨道に著しい段差を有する「高壇式」と呼ばれる東上総地方特有の形態をとるタイプで古いものは、茂原市山崎横穴群中の横穴墓に7世紀前半から中葉にかけての土器を伴うものがあり、夷隅町東前横穴群も同様のものがある。

東上総での横穴墓の最大の特徴は「高壇式」で玄室内部が家形を呈している形態が多いことである。特に、寄せ棟平入りの天井構造と部材の浮彫を見事に表現したものが多く見られるのが特徴である。徳増支群における1号、4号、14号はその代表例である。

房総に横穴墓が登場する時期は、およそ6世紀後半と考えられており、7世紀以降飛躍的に数が増加するが、その終末時期については、横穴墓の性格上、追葬、中性におけるヤグラへの転用の問題等があり、解明するのにまだ難しい問題が多く残っている。

B 長柄横穴群の年代

今回の調査により出土した遺物はわずかであり、また、追葬が考えられ、その構築年代を考



第15図 県内の横穴墓の分布 (1/800,000)

えるときに、平面企画の基準尺度の変遷を時期の根拠として援用した。

池上悟氏によれば、6世紀第4四半期に晋尺(24cm)から高麗尺(35cm)へ、7世紀第1四半期に高麗尺(35cm)から唐尺(30cm)へ、7世紀第2四半期に唐尺(30cm)から唐小尺(25cm)へ変遷しているとしている。この尺度を援用すると、当支群では第18号横穴墓で高麗尺(35cm)を使用していると思われ、6世紀第4半期から末にかけて構築されている。遺物としては静岡県湖西窯産の口縁部直下に段をもち、頸部中央に2条の沈線を持つ7世紀第1四半期に比定されるフラスコ型提瓶が出土している。当支群の中では一番古いタイプと考えられる。したがって、造られた順番として天井が蒲鉾型で狭いものから、狭い幅が広くなり、また、7世紀第1四半期には天井の形が家形になるものが出現し、蒲鉾型のものと併存しながら時代が下ってくるものと考えられる。7世紀前半から一部9世紀にかかるまで、順次構築、利用されていたと考えられる。

C 線刻画について

今回の調査の最大の成果は豊富な題材を持つ第13号横穴墓の線刻画の再発見である。そのために正確な大きさ、位置関係を記録するために写真測量を実施した。まだ解読できない部分もあるが、写真測量をしてあるため今後も検討を加えていくことが可能である。今回の報告はまだ中間報告と言うべきものであり、素材の提示にすぎないが、今後の検討を期待していただきたい。

五重塔は逆三角形の屋根が四層描かれ、一階の三角形の屋根を加え五層の建物とする点、相輪と思われる表現部分があることを根拠として、五重塔を描いたものと考えた。茨城県常陸太田市の幡横穴墓群6号横穴墓に三重塔と思われる類例があるが、五重塔の例は全国で初めて知見されたものである。

第13号横穴墓の線刻画には鳥が多いのが特徴である。鳥はこの世とあの世を行き来する乗り物と考えられていたようである。また、東南アジアの民族例では、舟に乗せてあの世へ送る例があり、鳥と舟と人が同時に描かれているものも興味ある題材である。

人物像は顔を中心に描かれており、埴輪のような細い横長の目をかいっている。7世紀後半には木製の人物像が造られているが、その顔の書き方にも似たタッチで描かれている。

建物については、三角屋根で表現した重層の建物、三角屋根で表現した竪穴住居、逆三角形の重層で表現した五重塔の3種類があり、この時代の人に建物の違いが認識されているのが理解できる。

次に描かれた時期についてであるが、第13号横穴墓が平面企画の基準尺度として唐小尺に近似する25cmを使用したと考えられる7世紀第2四半期から中葉より下る時期に描かれたものと考えられる。

D 小結

今回の調査によって、長柄町横穴群徳増支群が線刻画を有することで全国的に知れるところとなつたがそれだけではなく、当支群には形態も大型、整美なものから小型、簡略なものまで、いくつかのタイプが認められる。大型玄室を持つものの中で、家形のものには棟や垂木を浮彫で表現した精巧な造りのものもあり、見事である。こうした玄室構造に、当地域の古代人の死生感、埋葬概念を見て取ることができる。古墳時代中・後期を通じて当方は古墳分布が少なく、7世紀第2四半期以降爆発的な横穴墓の増加が見られる。この時期に、社会経済状況や共同体内部で何らかの変質があった結果と思われる。

県内の横穴墓は上総・安房地域を中心に明瞭な分布域を示しているが、地域ごとに出現あるいは展開段階で異なる背景を有しており、それが、終末期の古墳及び集落の展開から見た地域性とも共通している点で軽視できない要素が含まれている。ただ、東北の横穴墓にあるような金銅製品や彩色壁画などがほとんど認められないことから、終末期の高塚古墳より低いクラスの被葬者層が想定される。

漆喰の分析について、徳増支群のほとんどの横穴墓には羨道、玄室の下半分に白く発色した部分があり、日本文化財環境研究所の見城敏子先生、新井英夫先生に分析をお願いした。その結果、母岩の上に暗褐色の珪藻土の粘土層を構築し、その上にカルシウム分を主体とする消石灰に膠着材を混ぜた白色の漆喰を壁面に塗布していることが判明した。また、一部ペンガラが発色している部分もあるがこれは母岩中の鉄分が滲みだしたものと考えられる。漆喰が塗布された壁面は現況では壁の下半分にのみ認められる。これは開口していたため漆喰の遺存状況が悪かったからと考えられ、そのため上半分は剥落したものと思われる。見城先生によれば、漆喰の上に彩色あるいは線刻をしたものではなくて、壁面を強化するために塗布されたようである。

最後に線刻画であるが、描かれた線刻のタッチが前述したとおり3種類存在し、また、棺座の数が3基であることを考へるならば、その描かれた時間差も追葬に伴うものと考えられ、3期に分けることの根拠の一つになる。さらに、はじめから追葬を考えた玄室プランの設計にも関わるものと思われる。ここでは、詳細に検証できなかったが今後の課題として何らかの機会に再度詳述してみたい。

千葉県教育委員会「千葉県木更津市中尾横穴発掘調査報告」1976、1977年
岩横穴群発掘調査団「岩横穴群発掘調査報告書」1977年
西国吉横穴群発掘調査団「西国吉横穴群」1972年
財団法人千葉県文化財センター「山崎横穴群」1982年
財団法人茂原市文化財センター「山崎横穴群」1988年
財団法人茂原市文化財センター「茂原市文化財センター一年報」1 1987年
財団法人長生郡市文化財センター「四反目横穴墓」1990年
睦沢村教育委員会「東谷横穴群1号横穴墓発掘調査報告書」1982年
財団法人山武南部地区文化財センター「瑞穂横穴群」
夷隅川流域史研究会「東前横穴群」1983年
國學院大學文学部考古学研究室「森山塚」『國學院大學文学部考古学実習報告』1984年
池上悟「横穴墓」1980年
池上悟「古墳出土の須恵器について—プラスコ型堤瓶—」『立正大学人文科学研究所年報』23号 1986年
睦沢町教育委員会「長楽寺横穴墓群D地区発掘調査報告書」1990年
池上悟「東国横穴墓の形式と伝播」『おおいた考古』4集 1991年
財団法人長生郡市文化財センター「千代丸・力丸横穴墓群」1991年
財団法人千葉県文化財センター「古墳時代1」「房総考古学ライブラリー5」1991年
財団法人千葉県文化財センター「古墳時代2」「房総考古学ライブラリー6」1992年
財団法人千葉県文化財センター「歴史時代1」「房総考古学ライブラリー7」1993年
佐藤克巳「東上総一宮川流域の特徴ある横穴について」「ふさ」2号 1972年

表2 長柄町横穴群徳増支群横穴計測値一覧表

番号	開口方向	横				通				都				玄				室	
		長さ	幅	高さ	高さ 有無	幅	高さ	幅	高さ	天井部型式	内	部	大	き	さ	高さ	床面面積	棺	
1	西北	3.00	2.40	2.75	○	1.75	2.10	1.00	家形	3.50	4.40	2.25	15.40	—	2	—	—		
2	南	2.20	1.60	2.30	○	1.40	1.50	0.90	家形	2.40	2.80	1.60	6.72	—	2	—	—		
3	南	1.50	2.10	—	○	1.50	1.76	—	圓錐形	2.00	3.25	1.90	6.50	—	1	—	—		
4	南東	1.70	2.40	—	○	1.65	2.28	—	家形	4.30	3.90	2.20	16.77	—	2	—	—		
5	南	3.00	1.45	2.75	○	1.75	1.40	1.00	圓錐形	3.00	3.40	2.10	10.20	—	1	—	—		
6	南	2.30	1.30	2.35	○	1.60	1.30	0.60	圓錐形	2.85	3.30	1.95	9.41	—	3	—	—		
7	東西	2.40	1.50	—	○	1.35	3.35	—	圓錐形	3.30	3.35	2.15	10.05	—	3	—	—		
8	南西	2.90	1.70	—	○	1.44	1.70	0.65	圓錐形	2.60	2.65	1.60	7.40	—	3	—	—		
9	南	3.80	1.65	1.60	○	1.75	1.65	1.15	圓錐形	3.25	4.35	2.90	14.14	—	2	—	—		
10	南	3.00	1.70	2.90	○	2.00	1.50	0.90	家形	2.20	3.20	1.80	7.04	—	3	—	—		
11	南	3.80	1.80	1.65	○	1.62	1.75	1.15	家形	3.40	4.20	2.25	14.28	—	2	—	—		
12	南東	3.45	1.70	2.35	○	1.55	1.35	0.80	圓錐形	2.55	3.10	1.75	7.91	—	2	—	—		
13	南西	2.60	1.42	2.46	○	1.72	1.35	0.95	圓錐形	2.69	3.78	1.85	10.16	—	3	—	—		
14	西南西	2.50	1.40	2.69	○	1.74	1.40	0.95	ドーム形	2.52	2.96	1.83	7.46	—	1	—	—		
15	西南東	2.90	2.13	2.81	○	1.86	1.77	0.95	家形	3.40	4.48	2.31	15.23	—	4	—	—		
16	南	2.90	1.70	2.46	○	1.76	1.72	0.70	家形	3.05	3.76	2.22	11.47	—	4	—	—		
17	南	2.80	1.92	1.98	○	1.36	1.77	0.62	家形	2.58	3.44	1.87	8.87	—	3	—	—		
18	西南東	4.20	1.00	—	○	1.58	1.08	1.30	圓錐形	1.55	1.68	1.46	2.60	—	1	—	—		
19	南東	2.90	1.38	2.14	○	1.16	1.38	0.98	圓錐形	2.27	2.37	1.90	5.38	—	2	—	—		
20	西南東	4.30	1.28	—	○	1.56	2.43	—	圓錐形	1.99	2.54	1.53	4.82	—	1	—	—		
21	西南東	3.80	2.00	—	○	1.28	2.04	—	圓錐形	1.84	3.00	1.92	5.52	—	1	—	—		
22	西南東	—	—	—	○	—	—	—	圓錐形	2.65	3.25	1.92	8.61	—	2	—	—		
23	南東	2.60	2.27	2.55	○	1.05	1.92	2.40	圓錐形	2.94	3.90	2.44	11.46	—	3	—	—		
24	南東	2.17	2.07	2.63	○	1.68	1.77	1.20	圓錐形	2.48	3.97	3.01	9.84	—	2	—	—		
25	南東	1.17	1.85	1.88	○	0.75	1.80	1.17	圓錐形	3.47	4.34	2.03	15.05	—	2	—	—		
26	南東	0.80	2.18	1.47	○	—	2.38	—	家形	3.32	4.54	2.68	15.07	—	—	—	—		
27	東南東	1.07	1.40	2.57	○	1.86	1.46	2.53	圓錐形	3.44	3.69	4.45	12.69	—	3	—	—		
28	南東	1.43	1.58	2.42	○	1.07	1.72	0.83	圓錐形	2.96	3.71	2.03	10.98	—	3	—	—		
29	東南東	1.32	1.79	2.06	○	1.20	2.21	2.53	圓錐形	3.05	3.75	1.93	11.43	—	2	—	—		
30	東南東	—	—	—	—	—	2.98	1.87	ドーム形	3.34	4.04	1.70	13.49	—	2	—	—		
31	東南東	—	—	—	—	—	3.46	—	圓錐形	1.14	3.66	2.08	4.17	—	—	—	—		
32	東南東	—	—	—	—	—	—	—	家形	1.98	4.15	1.86	8.21	—	—	—	—		
33	西南東	2.65	1.90	2.54	○	1.63	2.20	1.43	家形	2.69	4.50	2.08	12.01	—	4	—	—		
34	西南東	2.30	1.63	2.77	○	1.06	—	1.60	家形	3.25	3.79	2.12	12.31	—	4	—	—		
35	南西	1.17	1.57	1.99	○	—	1.75	2.35	家形	2.75	3.02	2.49	8.30	—	—	—	—		

「長柄横穴群 - 千葉県長生郡長柄町横穴群総合調査報告書」 斎藤忠 朝和52年(1977年) 小宮山出版株式会社

「千葉県記念物実態調査報告書II」 平成2年(1990年) 千葉県教育委員会

以上をもとに加筆補正して作成

表3 県内所在装飾横穴一覧表

番号	古 墓 名	所 在 地	図文の場所	図 文 の 標 印	備考
1	鶴谷東原Ⅰ横穴群1号	長生郡長岡町鶴谷	玄室	人物・馬・鳥	縦刻
2	鶴谷東原Ⅰ横穴群26号	長生郡長岡町鶴谷	玄室	五輪塔・仏像	縦刻
3	鶴谷東原Ⅱ横穴群32号	長生郡長岡町鶴谷	玄室	五輪塔	縦刻
4	鶴谷東原Ⅱ横穴群1号	長生郡長岡町鶴谷	玄室	「正治五年」	縦刻
5	照原月川横穴群1号	長生郡長岡町照原	玄室	「文明二年三月」	縦刻
6	齊藤・谷横穴群2号	長生郡長岡町立島	玄室	「文明二年二月」・「南無阿弥陀仏」	縦刻
7	千代丸・力丸3号横穴	長生郡長岡町力丸四ヶ谷	玄室	柱を表現	縦刻
8	千代丸・力丸5号横穴	長生郡長岡町力丸五ヶ谷	玄室	家・人?	縦刻
9	千代丸・力丸12号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	家屋?を表現	縦刻
11	千代丸・力丸13号横穴	長生郡長岡町力丸四ヶ谷	玄室	家?	縦刻
12	千代丸・力丸16号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	家屋?を表現	縦刻
13	千代丸・力丸25号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	弓・刀・人物・獣	縦刻
14	千代丸・力丸26号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	家屋?を表現	縦刻
15	千代丸・力丸27号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	家屋?を表現・鳥・人物	縦刻
16	千代丸・力丸28号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	人物?	縦刻
17	千代丸・力丸30号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	家?	縦刻
18	千代丸・力丸31号横穴	長生郡長岡町力丸四ヶ谷	玄室	家?・鹿・船	縦刻
19	千代丸・力丸32号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	人物	縦刻
20	千代丸・力丸34号横穴	長生郡長岡町力丸四ヶ谷	玄室	家屋?を表現	縦刻
21	千代丸・力丸36号横穴	長生郡長岡町力丸九ヶ谷	玄室	桃木?を表現	縦刻
22	地増横穴5号	長生郡長岡町地増字堀六谷	玄室	人物	縦刻
23	地増横穴6号	長生郡長岡町地増字堀六谷	玄室	人物・弓を持つ人物・動物	縦刻
24	地増横穴13号	長生郡長岡町地増字堀六谷	玄室	人物・鳥・家・五重塔・三面蛇・バ・船	縦刻
25	地増横穴14号	長生郡長岡町地増字堀六谷	玄室	木の瘤状	縦刻
26	地増横穴30号	長生郡長岡町地増字堀六谷	玄室	水鳥・家	縦刻
27	木崎横穴群防符八卦	長生郡長岡町木崎			縦刻
28	木崎横穴防符八卦	長生郡長岡町木崎			縦刻
29	豊原横穴	長生郡長岡町豊原台			縦刻
30	押口3号横穴	坂原市押口字塚谷	玄室	人面?ほか	縦刻
31	赤各横穴群中の1基	坂原市赤各字塚前浜谷・半白瀬			縦刻
32	山崎横穴1号	茨原市山崎	玄室	家屋?の表現	縦刻
33	山崎横穴9号	茨原市山崎	玄室	人物	縦刻
34	山崎横穴12号	茨原市山崎	玄室	家屋?の表現	縦刻
35	外原田2号横穴	市原市外原田字井舟井4	玄室	人物・鳥・鳥	縦刻
36	外原田2号横穴	市原市外原田字井舟井4	玄室	人物・鳥	縦刻
37	大和田横穴1号	市原市大和田字御間	玄室	人物	縦刻
38	大和田横穴3号	市原市大和田字御間	玄室	人物	縦刻
39	桑田横穴群中の1基	市原市桑田字吉首田	玄室	人物	縦刻
40	西向台2号横穴	市原市西向台	玄室	人物	縦刻
41	内田横穴群中の1基	富津市西大和田字内田・立畠	玄室	人物	縦刻
42	岩坂大内1号横穴	富津市坂本・大浦	玄室・通道	帆船・網?	縦刻
43	岩坂大内2号横穴	富津市坂本・大浦	玄室	船	縦刻
44	岩坂大内3号横穴	富津市坂本・大浦	玄室	五輪塔?馬?	縦刻
45	岩坂水槽横穴群1群1号	富津市坂本			縦刻
46	龜田大内1号横穴	富津市龜田	玄室	人物?馬?船?	縦刻
47	相野谷横穴	富津市相野谷北谷			縦刻
48	鹿島横穴8号	富津市大賀町鹿島		馬・船	縦刻
49	若井作横穴群	富津市小久保字若井作	玄室	「儀文(シズ・シドリ)」	縦刻
50	網根方横穴群1号	富津市網根方	玄室	「許世」・「大門口」・「大元年」	縦刻
51	網根方横穴群10号	富津市網根方	玄室	「木」	縦刻
52	金城横穴2号	木更津市中尾金星堂768-1			縦刻
53	西人日横穴群D群1号	木更津市中尾西762			縦刻
54	南条1号横穴	館山市南条山	玄室	人物	縦刻
55	西大須横穴群	香取郡下館町西大須賀津		朱塗り	彩色
56	葛ノ山1号横穴	八日市場町八字葛ノ山	玄室	不明(+など)	縦刻
57	葛ノ山2号横穴	八日市場町八字葛ノ山	玄室	不明(+など)	縦刻
58	葛ノ山葛ノ墓A群4号	八日市場町八字葛ノ山	玄室	不明幾何学文	縦刻
59	葛ノ山葛ノ墓A群9号	八日市場町八字葛ノ山	玄室	不明(+)	縦刻
60	吉田小下原横穴群1号	八日市場町吉田字小下原	玄室	不明・「天平元年」	縦刻
61	吉田小下原横穴4号	八日市場町吉田字小下原	玄室	船・「天平」	縦刻
62	吉田小下原横穴14号	八日市場町吉田字小下原	玄室	不明	縦刻

古代史発掘8 「装飾古墳」古墳時代3・昭和49年(1974年) 講談社

古墳墓資料「日本古墳地名表」赤堀志・杉博久・昭和58年(1983年) 古川弘文館

特別展「装飾古墳」地下を彩る名画の世界・諸説 平成2年(1990年) 東京市立博物館

翌年10月「装飾古墳の世界」國立歴史民俗博物館開館10周年記念企画展示総合 平成3年(1993年) 朝日新聞社
以上の間に報告書・論説等をもとに成

写 真 図 版



遺跡遠景



第1号横穴墓



第2号横穴墓



第3号横穴墓



第4号横穴墓
義道セクション



第4号横穴墓
玄室右棺台



第4号横穴墓
玄室奥壁



第4号横穴墓
玄室左棺座



第9号横穴墓



第10号横穴墓



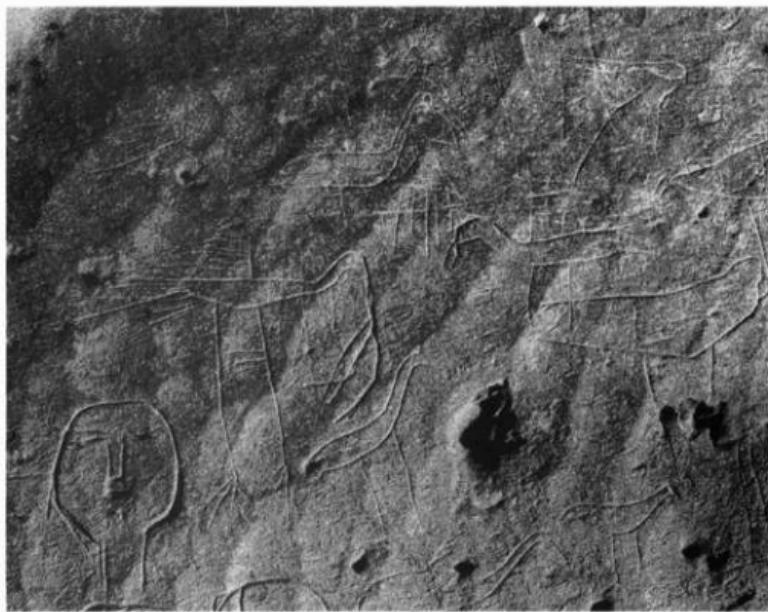
第11号横穴墓



第12号横穴墓



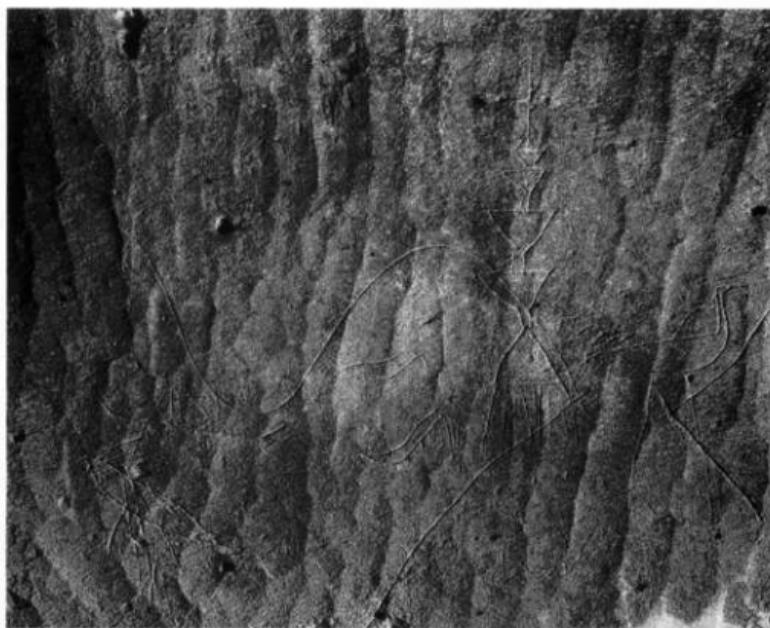
第13号横穴墓



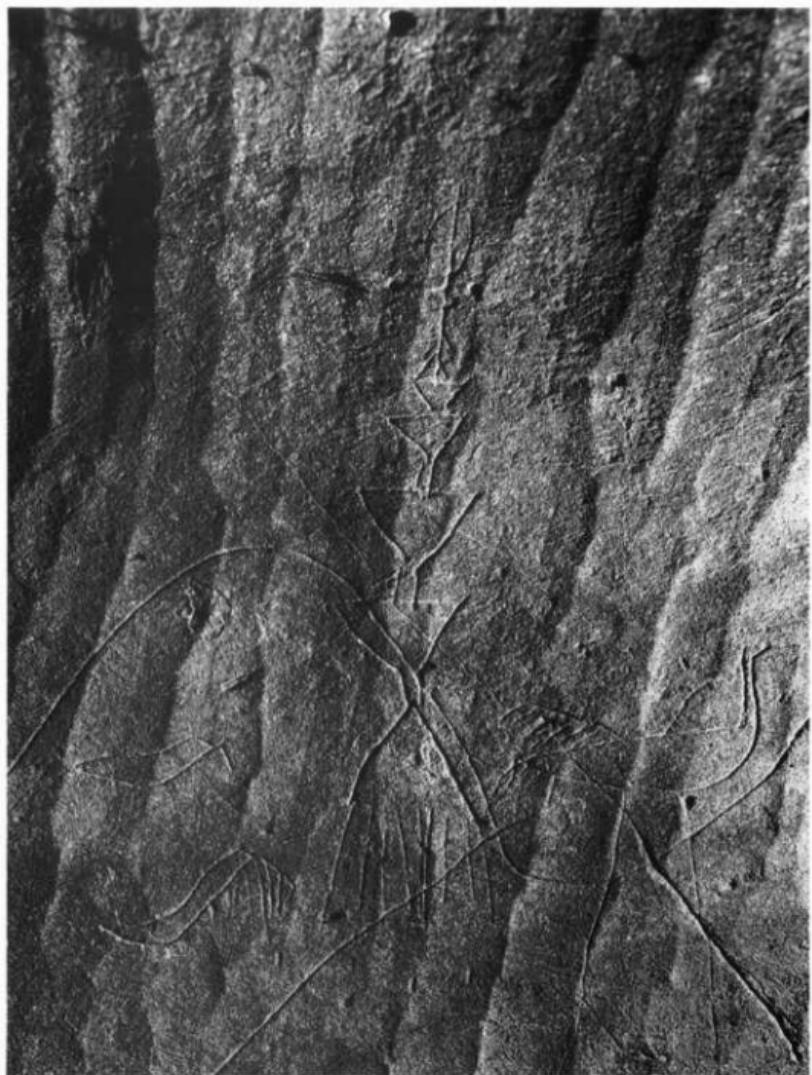
第13号横穴墓玄室奥壁左上部線刻画（人物・鳥・建物）



第13号横穴墓玄室奥壁線刻画



第13号横穴墓玄室右側壁線刻画（建物・鳥・舟・人物）



第13号横穴墓玄室右侧壁线刻画（建物・鳥）



第13号横穴墓玄室奥壁線刻画（鳥・人物）



第13号横穴墓玄室奥壁線刻画（鳥・家・人物）



第14号横穴墓



第13・14号横穴墓
前トレンチ



第15号横穴墓



第16号横穴墓



第17号横穴墓



第18号横穴墓



第18号横穴墓
遺物出土状況



第19号横穴墓



第19号横穴墓
キサゴ出土状況



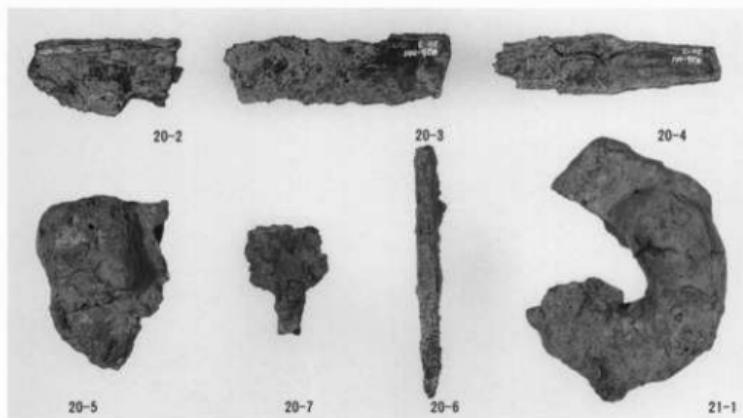
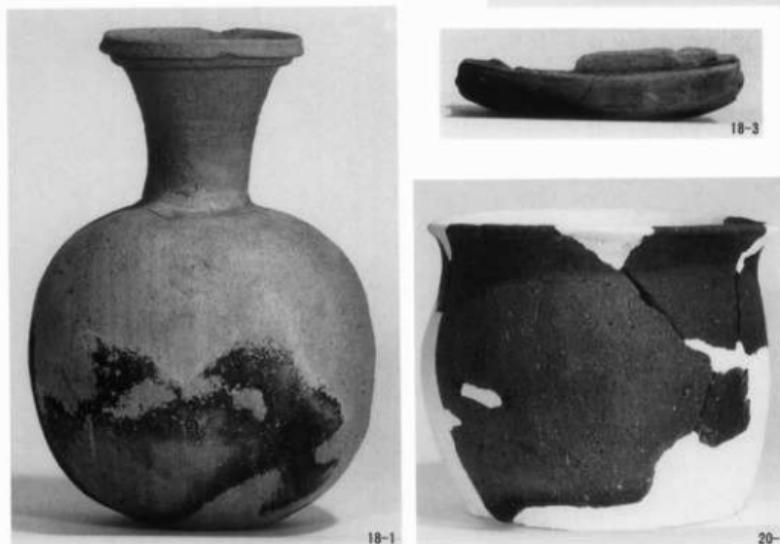
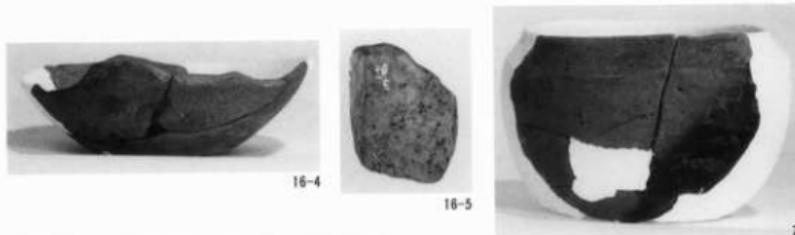
第20号横穴墓



第20号横穴墓
遗物出土状况



第21号横穴墓



長柄町横穴群徳増支群出土遺物



1. 第1号横穴墓羨道右壁



2. 第9号横穴墓羨道左壁



3. 第13号横穴墓羨道右壁

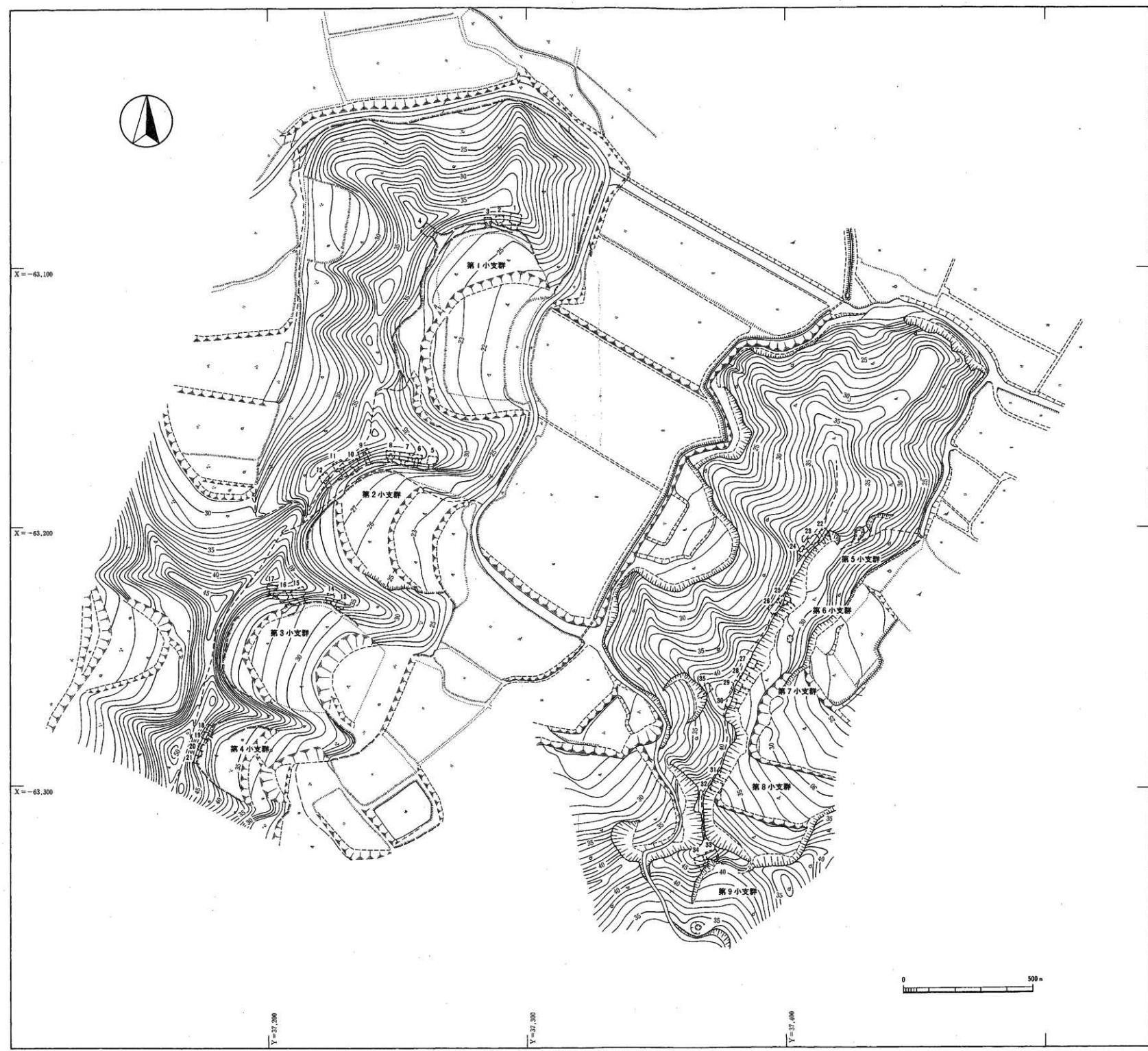


4. 第14号横穴墓羨道右壁

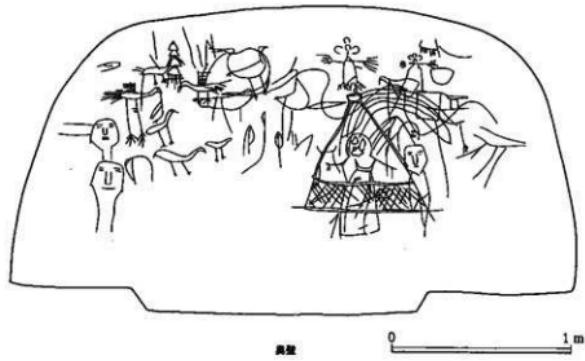


5. 第16号横穴墓羨道右壁

漆喰分析試料と実体顕微鏡写真 ($\times 6.3$)

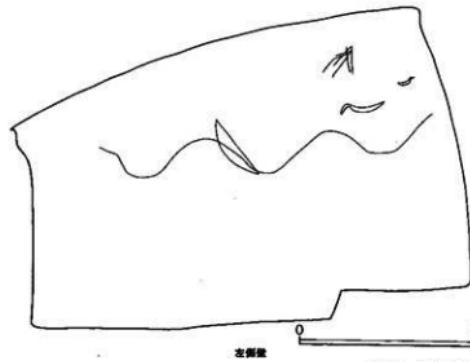


付图1 長柄町横穴群徳増支群地形測量図 (1/1,000)



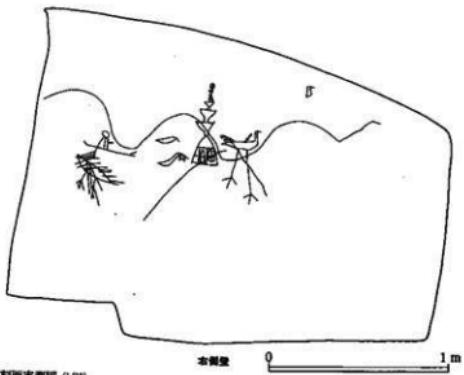
真量

0 1 m



左侧壁

0 1 m



右侧壁

0 1 m

付图2 第13号椭穴墓室壁面素描图 (1/20)

報告書抄録

ふりがな	ながらまちよこあなぐんとくますしぐんはくつちょうさほうごくしょ
書名	長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第259集
編著者名	麻生正信
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター TEL043(422)8811
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡 809-2
刊行年	1994年3月31日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長柄町横穴群徳増支群	長柄町横穴群徳増支群	12426	001	35度 25分 44秒	140度 14分 37秒	1993.10.01 ~ 1993.10.29	200m ²	国庫補助事業による学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長柄町横穴群徳増支群	横穴墓	古墳時代	横穴墓35基	土師器 壺・坏・椀 須恵器 プラスコ型提瓶 坏身・坏蓋 刀子・鉄鐵・鈔 貝輪・キサゴ 経石	第13号横穴墓から、線刻画が発見された。第18号横穴墓からは、当支群の初現期と思われるプラスコ型提瓶が出土した。

千葉県文化財センター調査報告 第259集
長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書

平成6年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。